

特 258

438

白樂天  
實 盛  
楊貴妃  
玉 葛  
融

丙  
四

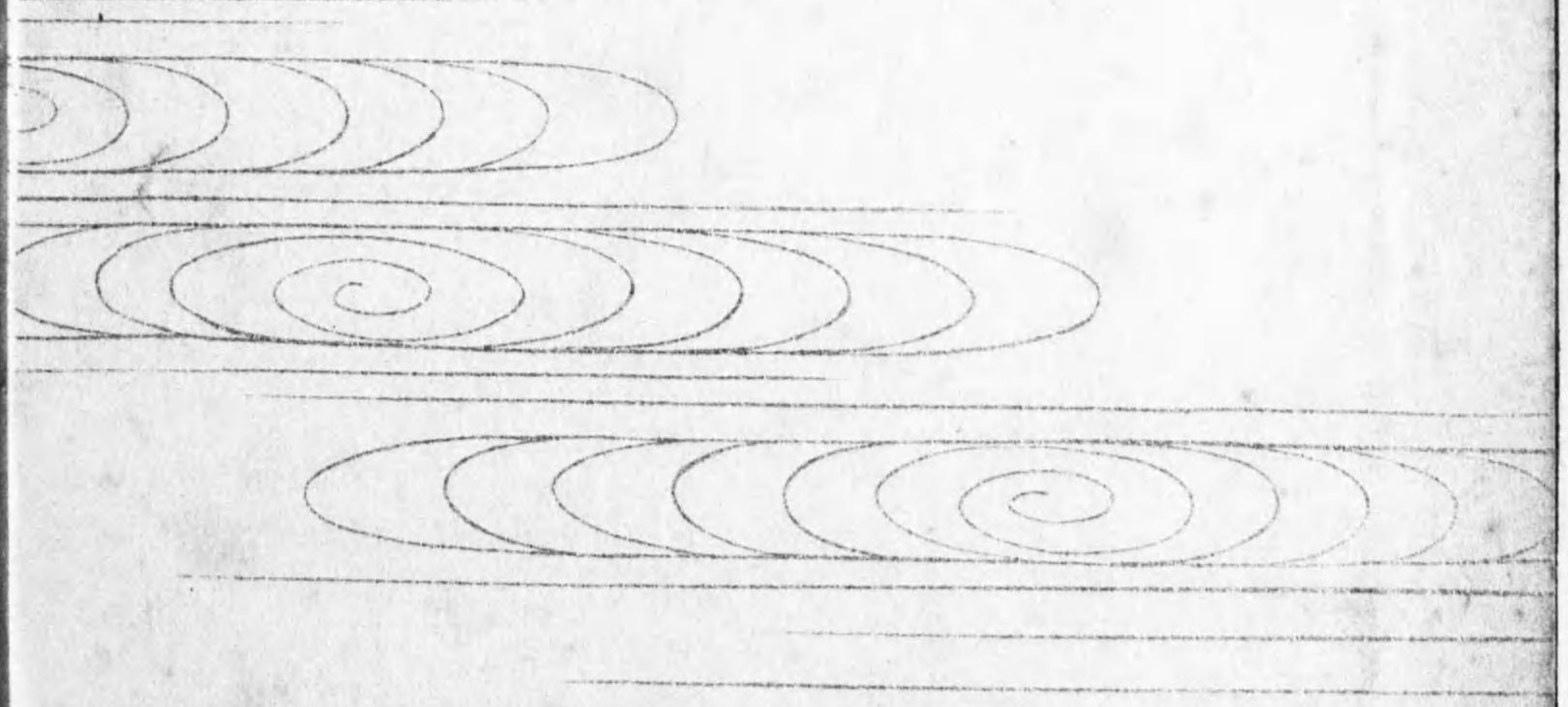
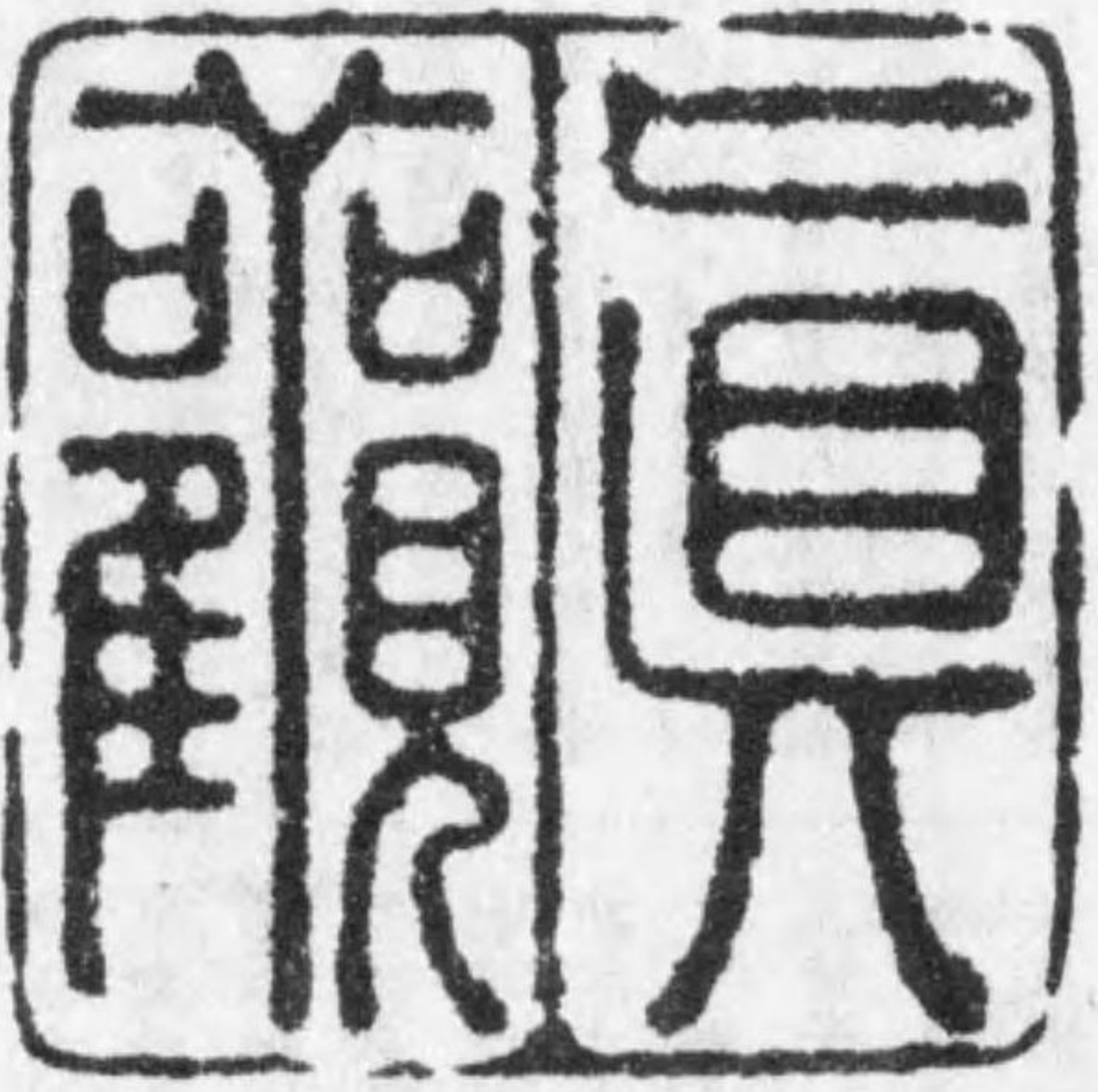


始





特 258  
438





# 白樂天

世阿彌元清作

曲 初 能 一番目 神祇物  
季 節 不 定  
所 古 順 二 級 九州筑紫海上

## 梗概

唐の太子の賓客白樂天(ワキ)、日本の智慧を計れとの王命を受けて、筑紫の海上に來りし處に、一人の漁翁(シテ)年若き男(ツレ)と共に小船を浮かべわたるを見て、まづ言葉をおくれば、漁翁、御身は唐の白樂天にてましますな、といひ樂天の驚くも知らず顔に釣を垂る。樂天、即興の詩を吟ずれば、漁翁また忽ちにこれを和歌に翻案し、わが日本にては人間のみならず、生きとし生けるもの皆歌を詠むなり。例へば孝謙天皇の御宇、大和國高天寺に鳴く鶯の聲を聞けば、即ち和歌なりき、とてもものに、舞歌の遊を見せんといひて去る。(中入)

やがて、住吉明神(後シテ)現れ出で、わが力のあらん限りは日本の國を窺はせじといひて、舞を舞ひ給へば、伊勢、石清水等の諸神乃至八大龍王も現れて、様々の舞曲をなすほどに、舞の袂より起る神風によりて、樂天の船は支那に吹き戻されたり。

## 謡ひ方

位は閑かにして滋味あり、同じ眞の序の舞ある老松と比すれば、少しく強味を持ち謡ふ。

△シテ 眞の一聲の出なれば、調子を抑へて確かりと謡ひ出し、サシよりは氣を替へ滞らぬ様、ワキとの掛合は閑かに手強くならぬ様、詩歌の問答は抑へて確かり「苔衣」の歌は和吟の交る處あり、節扱に注意し、跡は段々と詰めて謡ひ、ロソギは確かりと閑かに、止めの「此舞樂の」は極閑めて確かりと地へ渡す「蘆原の」大きく閑かに謡ふべし。

△後シテ 出は閑かに確かりと、ワカは朗かに大きく「現はれ出でし」と寛たりと謡ふべし。

△ツレ シテと連吟の處はシテの調子に従ひ、一人の處は、シテよりは調子を高めさらりと謡ふ。

△ワキ 半開口はワキ方の出の習にして、謡には關係なし。出は極閑かに威風凛々と謡ひ出し、道行はさらりめに確かりと、シテとの掛合は氣高く確かりと謡ふなれど、シテの位を奪ふべからず。



△地 初同は調子を抑へて閑かに出で、二の同は閑かの内に  
もさらりめに、クセ上端は運び能く、ロンギは心持を變へて  
確かりと「鼓は波の音」よりシテの位を受けて閑め段々閑ま  
る様に、中入前はとくと閑めて謡ふべし。後もしテの調子に  
従ひ、確かりと落着を附けて閑かに謡ふべし。

能の異式(小書)

波夜陀麻傳 — クセが脱け舞も替る。

長序 — 舞の掛りが替る。

語釋

唐の太子の賓客 — 太子賓客は官名、我國の春官學士に當る  
此句は白氏文集酒功賛の序にある唐太子賓客白樂天とあるを  
引用す。

白樂天 — 支那盛唐の大詩人、姓は白、名は居易、字は樂天  
大曆七年生る太原の人、醉吟先生と號す又香山居士ともいふ  
元和初年進士に擧げられ同二年翰林院學士となり後左階進、  
江州司馬、知制誥、刑部尙書を歴任した、卒後右僕射を追贈  
さる性酒を好み流暢明達な詩文を作つた、白氏長慶集は彼の  
全集なり、支那後世は勿論、朝鮮又は我平安朝にも深く愛讀  
せられ、歌人の白樂天の詩を翻案せるもあり、唐の宣宗皇帝  
の大元中に卒す、年七十五。

越を辭せし范蠡 — 陶朱公といふ。勾踐に従つて吳を討伐し  
世平定して後功成り身退くとて、舟に乗つて五湖に浮び、再  
び世に出でざりしと傳へらる。

松浦瀉 — 肥前國松浦郡の海。

天竺の靈文 — 陀羅尼のこと。

唐土の詩賦 — 詩は五言七言などに字句を限り韻を踏みたる  
もの、賦は定限なき字句に韻を踏みたるものをいふ。

青苔衣をおびて — 江談に曰く、後の中書王文藻の詩に「白  
雲似帶圍山腰青苔如衣負巖背一年々別思驚秋雁夜々幽  
聲到曉雞」と、此詩萬人皆伏せざるなき名詩とす。

苔衣きたる巖は — 江談に曰く、後の中書王文藻の歌とて  
「苔衣きたるいはほはまるびけん衣着ぬ山の帯するはなぞ」  
とあり。日本風土記には岩衣山帯といふ題にて「苔衣きたる  
いはほは寒からで衣着ぬ山に帯をするかな」と記せり。

生きとし生ける物 — 古今集の序に「花に鳴く鶯、水に住む  
かはづの聲を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠  
まざりける」と記されたり。即ち生ある者は感あり、感ある  
ものは情あり、情あるもの、聲は即ち歌となるといふ意。

孝謙天皇の御宇 — 古今秘傳に曰く「孝謙天皇の御宇、大和  
の國高滿寺に僧あり、彼弟子に小兒のありしが、或る時死す  
歎くこと尤も深し。然りと雖も月日を送りて愁を忘れけり。

斯くて次の年鶯來りて鳴く。其聲を聞けば、初陽毎朝來、不  
遭還本栖と鳴く。之を文字に寫して見れば歌なり。「はつは  
るのあした毎には來れどもあはでぞかへるものすみかに」  
とありしとなり。

高天寺 — 大和國南葛城郡葛城村高天。

西の海青きが原の波間より顯はれ出でし住吉の神 — 續古今  
集第七卷神祇に載す、卜部兼直の詠せし歌、但初句に「西の  
海や」とあり。

住吉の神の力の — 住吉明神は和歌三神の一つにして歌道を  
守る神なり。

石清水 — 京都府下綴喜郡石清水八幡宮のこと。

賀茂 — 京都市賀茂別雷神社のこと。

春日 — 奈良市に祭祀せらるる春日神社のこと。

鹿嶋 — 茨城縣鹿嶋郡鹿嶋町に祭祀する鹿嶋神宮。

三嶋 — 靜岡縣田方郡三嶋町に祭祀する三嶋神社。

熱田 — 名古屋市熱田に祭祀する熱田神宮。

嚴島 — 廣島縣安藝國佐伯郡に鎮坐する嚴島神社。

娑竭羅龍王の第三の姫宮 — 八大龍王の一にして、此龍王の  
住ふ處は海なるが故に此名あり。娑竭羅は梵音サーガラにし  
て鹹海と譯す。新華嚴經五十如來出現品に「娑竭羅龍王欲  
現龍王大自在力饒益血生咸令歡喜從四天下至他化

自在天處與大雲網周匝彌覆其雲色相無量差別」と説き、不  
可思議力を現はす。嚴島明神は此龍王の第三の姫宮なりと平  
家物語に記されたり。

小忌衣 — 朝廷の御神事に祭官の用ゐる裝束。

手風神風 — 衣の手風とつゞけ、舞の袂を翻へすにつれて起  
る風といふ意にかけて神の威力を表したること。

問狂言

住吉明神の末社。

斯様に候者は住吉大明神に仕へ申す末社の神にて候。去程に  
我朝に靈神數多あれど。中にも當社明神は君を守護し國家を  
守り給ふ。それを如何にと云ふに。唐の太子の賓客白樂天は  
大唐にてさへ理根者と云はれしに。ましてや日本は粟散遍地  
の小國なれば。定めて智慧愚かあるべし。然らば日域の人の  
心を計りて。隨へんと企み此度渡るを。住吉大明神は早や神  
通なれば御存じなされ。彼の者を陸へ上げては悪しかりなん  
と思召し。賤しき釣の翁と御身を現はし。今の唐船の邊の海  
上に浮かみ給ふを。唐土人は見付け。あれは日本の者かと云  
ふを聞き給ひ。儲は心易しさせる智慧にてはなし。此國の人  
を見ながら日本の者かと問ふ程にては。さしたる事はあるま  
じと思召し。是は我朝の漁翁にて候が。御身は唐の白樂天に  
在すかと御申しあれば。漢朝人は大きに驚き。我れ此國へ初



めて渡るに。はや名を知られたるは不審なりと思はれ。借此頃日本にては何を翫ぶぞと問はれしを。偕又唐土にては何事を翫び給ふぞとあれば。唐土にては詩を作りて遊ぶよと云ひし程に。日本にては歌を詠うで人の心を慰め候と仰せられければ。抑も歌とは如何に。天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を我朝の歌とす。三國を和らげたるを以て。大きに和らぐ歌と書いて大和歌と讀めり。知ろし召されて候へども翁が心を御覽せん爲候なとあれば。いやそれにてはなし。いで目前の景色を詩につけて聞かせうとて。青苔衣を帯びて巖の肩に懸り。白雲帯に似て山の腰を廻ぐる。心得たるか漁翁と言はるゝを。又明神は此心を歌に苔衣着たる巖はさもなくて。衣着ぬ山の帯をするかたと。斯く詠じ給ふを樂天聞き姿は賤しき釣人なるが。歌を詠む事不審なりと云はれしを。和國に於て歌を詠する事人間は申すに及ばず。鳥類畜類迄も詠み申す其の仔細は。昔孝謙天皇の御宇に。大和國高天の寺の鶯は。初陽毎朝來不遭還本栖と啼くを。文字に興して和らげ見れば。初春の朝毎には來れ共。遭はでぞ歸る本の栖かにと。斯く御物語あるを唐人は聞き。大唐にては鳥類畜類などの詩を作りたる例しはなし。唯是より押し戻らんと思ふ心を御存じなされ。樂天暫く御待ちあれ。海上に立ち舞樂を見せ申さうするとて。其儘御還りなされたと申す間。先づあれ

へ參り唐船の模様を見物致さうと存する。如何に大唐の樂天と雖も。日本を妨げん事はなか／＼思ひもよらぬ事ぢや。偕唐船はどこにもあるぞ。いやあれに見ゆるよ。偕も偕も美しい事かなあそこへ某も行くか。いや／＼聊爾に行つては如何な。唯是にて一指奏で罷り歸らう。(此後常の通り)



白骨にして白地にうすく  
金泥の霞を引き  
墨繪を以つて竹林七賢を  
表裏に描く

尉髪を  
結ぶ尉の  
携ふる扇なり  
本曲にては前シテ之を持つ

作 物	装束附 (白樂天)			
	後シテ 任吉明神	前シテ 尉	ツレ 男	ワ キツレ 從者二人
釣棹	面、皺尉 初冠纒 白垂 白地金緞鉢卷 襟淺黄 着附段厚板又ハ小格子厚板 色大口 袴狩衣 繡紋腰帶 神扇	面、笑尉又ハ朝倉尉 尉髪 襟袴 着附無地鬘斗目又ハ小格子厚板 茶桂水衣 緞子腰帶 尉扇	直面 襟赤 着附無地鬘斗目 縷水衣 繡紋腰帶 扇	洞烏帽子 着附厚板 白大口 赤袴狩衣 繡紋腰帶 扇
				唐冠 赤金入鉢卷 着附厚板 白大口 袴狩衣 繡紋腰帶 扇又ハ唐團扇



白樂天

素 謠 座 席 頌  
ワシツ  
キテレ

半開ロ  
拍子ヨク  
ハズ

ワキ名乗



白樂天とはわが事なり。さうても  
これより東に當つて國あり。名  
を日本と名づく。急ぎがの玉に  
渡り。日本の智慧を討れど。宣  
旨に任せ。唯今海路に赴きぬ。



四時三上  
次才  
拍子三合

船漕ぎ出づ日の本の。船漕ぎ

出づ日の本の。そなたの國を尋

道行



ねん東海の波路遙かに行く

船の波路遙かに行く船の跡に

入日の影残る。雲の旗手の天つ

空。月また出づるそなたより。山

見えそめて程もなく日本の



地にも着きたけり日本の地にも

着きたけり海路を経て急ぎ

ひ程に。これははや日本の地に着

きてる。暫くその所に碇をおろし。

日本のやうを眺めばやと存トゆ

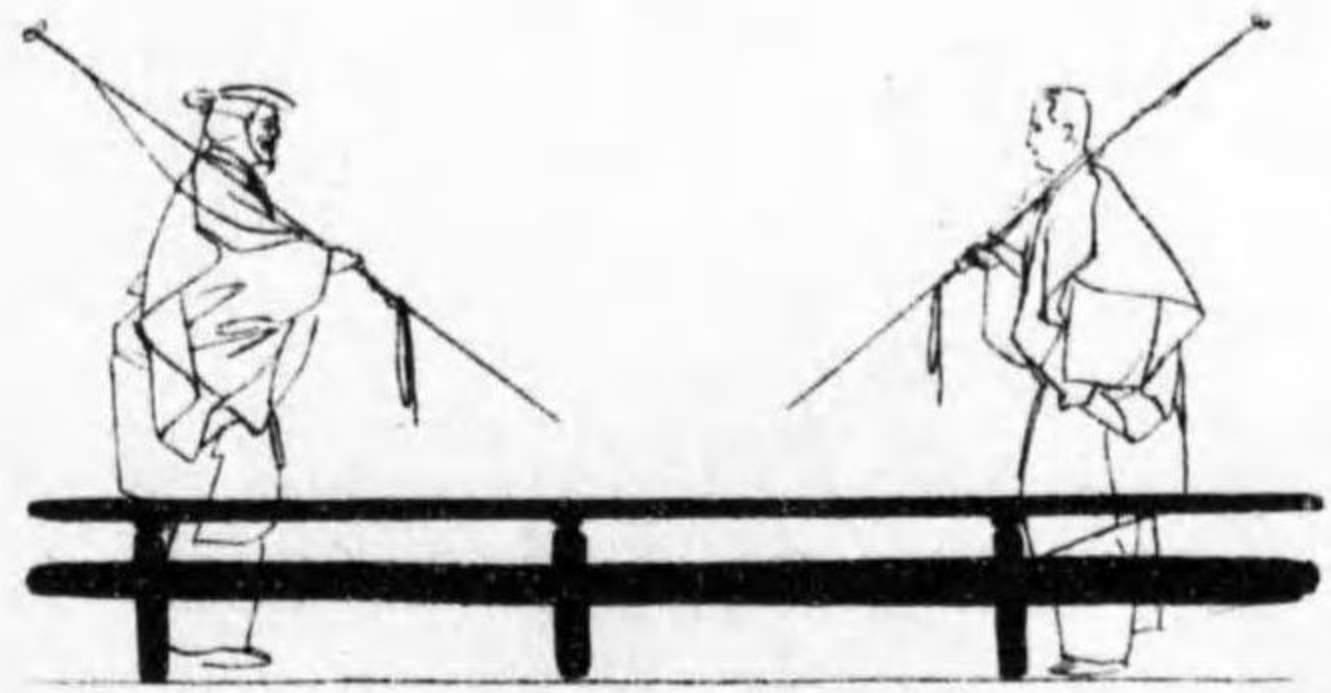
不知火の荒紫の海の朝ぼらけ。

月のみ残る。景色かな。巨水

シテ射天  
眞モイ  
拍子三合

抑テ確カリ





○小謡

漫々として碧浪天を浸し越  
 を辞せし范蠡が扁舟に棹を  
 移すなる五湖の煙の波の上が  
 くやと思ひ知られたりあら面白  
 の海上やな松浦瀉西に山な  
 き有明の月月の入る雲も浮  
 かむや仲つ舟雲も浮かむや仲つ

舟互にかる朝まだき海はそなた  
 か唐土の船路の旅も遠からで  
 一夜泊りと聞くからに月も程なき  
 名残かな月も程なき名残かな

ワヤ詞 確カリ

われ萬里の波濤を凌ぎ日本  
 の地にも着きぬこれに小船一艘  
 浮かめり見れば漁翁なりいかに

白樂天

三



あれなるは日本の者か ミテシトヤカニ せんが

これは日本の漁翁にてい。御身 確カリメニ

は唐の白樂天にてまますな

早カ生弓 不思議やな始めてこの世に渡り

たるを。白樂天と見る事は何の

故にてあるやらん ツレ その身は漢土

の人なれども。名は先立つて日本

に聞ゆ。隠れなければ申すなり

早上 たとひその名は聞ゆるとも。それ

ぞとやがて見知る事あるべき事

とも思はれず ツテ二人中抑ヘメニ 日本の智慧を

計らんとして樂天來り給ふべき

その聞えは昔まきの本に。西を

眺めて沖の方より。船だに見ゆれ



シテマロキの問答





○小謠

ば人毎にすはやそれぞと心づくし  
甲 上歌同 抑へた確カリ  
 今や今やと松浦舟今や  
拍子三合  
 今やと松浦舟。仲より見えて隠  
 れなき。唐土船の唐人を樂天と見  
 る事は何か空目なるべき。むつか  
 しや言さやぐ。唐人なればお言葉  
 をもともも聞きも知らばこそ

暇や釣たれん



早詞 気ラカへ確カリメ  
 なほなほ尋ぬべき事あり舟を

近づけゆいかに漁翁。さてこの  
 頃日本には何事を歌ふぞ

ワキ サラリ  
 唐土には何事を歌ひ給ひゆぞ  
トス  
 唐には詩を作つて遊ぶよ



それ天竺の靈文を



には歌を詠みて人の心を慰めゆ  
ワキ カンツテ こそも歌とはいかに シテ 用カニ こそあれ天竺の



靈文を唐土の詩賦と。唐土の  
詩賦を以てわが朝の歌とす。されば  
三國を和らげ來るを以て。大まに  
和らぐと書いて大和歌と讀めり。  
知ろ カシカロク 召されてゆ ユツカリナ とも。翁が心を

を覽せんためゆな ワキ カツテ いやその儀  
にてはなし カシカヘ いでさらば目前の景  
色を詩に作つて聞かせり。青苔 シテ 抑ヘテ  
衣をおびて イハホ 巖の肩に懸り。白雲 確カリメ  
帯に似て山の腰を圍る心得たる  
か漁翁 シテ 抑ヘテ 青苔とは青き苔の  
巖の肩にかれるが衣に似たると



かや。白雲ハクウ帯オビに似て、山の腰ウシを圍ツる。  
 面白ウツクシ面白ウツクシし。日本ニホンの歌もたゞ  
 さればよ。若ニホ衣イ着キたる巖イワはさも  
 なくて。衣イ着キぬ山ヤマの帯オビをすスるかた  
 不思議イマジナリやなその身ミは賤イマヤき魚イサ  
 翁オウゴンなるがかく心ココロある詠エイ歌カを連ツぬ  
 る。その身ミは如何イカニなる人ヒトやらん

ミテ詞 受ケテスラリ

人がまゝやな名もなき者なり。され  
 ども歌を詠む事は。人間のみに  
 限るべからず。生イまきとシ生イけるもの  
 毎ツに。歌を詠ヨまぬはなきものを  
 生イまきとシ生イけるものは。  
 さへ鳥チ類ル畜チ類ルまでもシテ和ワ歌カを  
 詠エイずるその例タメ和ワ國クニに於キてシテ證シ歌カ



○曹留は獨吟  
○切迄離子



タマシイロキキマデ

多し。上歌同。花に鳴く鶯。水にすめる。  
蛙まで。唐土は知らず日本には。  
歌を詠みぬぞ翁も大和歌をば。  
かたの如く詠むなり。そもそも  
鶯の歌を詠みたる證歌には。孝  
鎌天の御宇かよよ大和の國。  
高天の寺に住む人の。きねん

の春の頃軒端の梅に鶯の來り  
て鳴く聲を聞けば。初陽毎朝  
來不遭還本梅と鳴く。文字に  
寫してこれを見れば。三十一文  
字の詠歌の言葉なりけり。  
初春の。あまた毎には來れども  
遭はでぞ還る。本の梅にと聞え



つる鶯の聲を始めとして。その  
 外鳥類畜類の。人にたぐへて歌  
 を詠む。例は多くあり。そ海の  
 濱の真砂の數々に。生きたる生  
 けるもの。いづれも歌を詠むなり。  
 げにや和國の風俗の。あげにや和國  
 の風俗の心ありける。海士人のげに

ロギ地上

ありがたき習ひかな。とて。も和國  
 の翫び。和歌を詠じて。舞歌の曲  
 その色々を現さん。とて。もや舞  
 樂の遊び。とは。その役々は誰ならん  
 誰なく。とて。も。皆。賢。せよ。われだに  
 あらば。その舞樂の。鼓は。彼の  
 音笛は。龍の吟。する聲。舞人は





視れせし住吉の神

この尉が老の波の上に立つて青海  
 に浮かみつゝ海青樂を舞ふべしや  
 蘆原の國も動かす萬代までには  
 山影のうつるか水の青き海の  
 波の鼓の海青樂 眞之序之舞  
 西の海憶が原の波間より現  
 れ出でし住吉の神 速住吉の神



立ちかへり給へ樂天

○獨吟  
○仕舞  
上歌同

住吉の現れ出でし住吉の  
 住吉の神の力のあらん程はよ  
 も日本をば從へさせ給はし速か  
 に浦の波立ち歸り給へ樂天  
 住吉現し給へば住吉現し給へば  
 伊勢石清水賀茂春日鹿島三島  
 諏訪熱田安藝藝の巖島の明神



海青樂を舞ひ給ふは



は。安。竭。羅。龍。王。の。第。三。の。姫。宮。  
 に。て。海。上。に。浮。か。ん。で。海。青。樂。を。  
 舞。ひ。給。へ。ば。八。合。大。龍。王。は。八。り。ん。  
 の。曲。を。奏。し。空。海。に。翔。り。つ。舞。ひ。  
 遊。ぶ。小。忌。衣。の。手。風。神。風。に。吹。き。  
 戻。さ。れ。て。唐。船。は。こ。よ。り。漢。土。に。  
 歸。り。け。り。げ。に。あ。り。が。た。や。神。と。君。

吹き戻されて唐船は



○祝言小謡

宴に有難や



げ。に。あ。り。が。た。や。神。と。君。が。代。の。勤。  
 か。ぬ。國。ぞ。久。し。き。勤。か。ぬ。國。ぞ。久。  
 し。き。



# 實盛

世阿彌元清作

曲柄 二番目 修羅物  
季節 十一月  
稽古 級  
所 加賀國江沼郡篠原村笹原新

## 梗概

遊行上人(ワキ)加賀國篠原にて大念佛を行ひけるに、一人の老翁(シテ)毎日聽聞に来れるが、その姿餘人には見えざりしかば、上人訝りて、一日その名を問へば、始めは人がましき名もなしとて答へざりしが、一つには懺悔の爲なればと促されて、遂に齋藤別當實盛の幽霊なることを明かし、今は二百餘年を経たるも、なほ執念この地に残りて、浮かびもやらずと語り、傍なる池のほとりに行くと見えて、幻の如く消え失す。(中入)

上人、別時の稱名にて、かの跡を弔はんと、池の邊にて夜もすがら念佛すれば、實盛(後シテ)甲冑を帯して、水上に浮かび出で、上人の回向を喜びて、念佛往生の教へを尋ねなどしたる後、昔篠原の合戦に、こゝはわが故郷なればとて、宗盛に請うて錦の直垂を着し、白き鬘鬘を墨に染めて出陣し、手塚太郎に討たれたる次第を語り、なほも念佛を乞ふ。

## 謡ひ方

實盛頼政朝長を修羅三番と稱し、修羅物の中に最も重きものとせり。實盛頼政は同じ老武者なれど、本曲は頼政以上に難曲物とせられたり。總體前は滋味を主とし勢を失はず、後は老武者の意氣を失はず抑揚緩急に注意すべし。

△シテ 出はサシなれど、充分に抑へて閑かに重んもりと出で、處々氣を替へとあるに注意し、底力を強く含みて諳ふ、ワキとの掛合は處に依り變化あれど、總じて抑へて、勢を込めて諳ふ。節に細かき處あり、又和吟柔吟の變化あれば注意すべし「我實盛の幽霊なるが」と名乗りてより、以下抑へる内に確かりしたる心持あり「思ひをのみ」柔吟にて大切なり確かり重んもりと續けて「篠原の」と改め抑へて閑かに諳ふべし。

△後シテ 七十三歳の老武者なれば、出は抑へて閑かに重んもりと諳ひ出す、されど前シテの出と異り稍晴やかみを添へ調子の沈まぬ様に諳ふ「念々相續する人は」より氣を替へ大きく、ワキとの掛合より漸次に雄壯の心持ありて段々と詰め



クは重んもりと大きく確かり、語は老武者の意氣雄壯に、抑揚緩急多ければ文句に注意し、節になりてはさらりめに確かりと、和吟の交る處あれば心得て諺ふべし、ロンギは確かりと強味を含みて閑かに勢を付け早くならぬ様心掛くべし。△ワキ 遊行上人なり、氣高く位を持ち調子の高くならぬ様に確かりと諺ひ出し、上歌はのんびりと朗らかに諺ふ。シテとの掛合はシテの位を奪はぬ様に充分位を持ち、段々とさらりめに諺ふ、待詠は重んもりと閑かに、後シテ跡の掛合はさらりめに諺ふべし。

△地 初同(中入前)の地はシテの上歌を受けて調子を内へ取り、しつとりと寂しく高くならぬ様に諺ひ、中入後は「念々毎に往生す」よりシテの調子を受けて勢よく大きく「闇からぬ」より確かりと勢ひ能くさらりと、サシも勢を付けさらりと「氣晴れては」の上歌より伸んびりと引立て運びを付けグセは出を抑へて段々に運び、ロンギは氣を替へ勢の抜けぬ様に、強味を付け威を籠めて諺ふべし。

能の異式(小書)

長胡床 — 長く床几にかゝる形なり。

語釋

西方は十萬億土 — 佛教にては、概ね此娑婆世界より西の方

析本の近傍なりといふ。

齋藤別當實盛 — 姓は藤原、常陸介時長より出づ。時長鎮守府將軍利仁を生む、利仁賊を討つて功あり、其子叙用齋宮頭となる、子孫依つて齋藤氏と稱す。實盛は河合齋藤と稱せし助宗の四子實遠、成實、景實、宗景、實遠の孫にて越前國坂井郡長畝村に生る、後武藏長井に移り長井齋藤と稱す、初め源爲義に仕へ、保元の亂には義朝に従ひ功あり。義朝敗死するや平宗盛に仕へ、維盛に従ひ富士川の戦に敗走す、維盛の源義仲を北陸に討つや、宗盛に請うて曰く、臣前日の敗をそゝがんに、必ず此役に死を致さんと、願くは錦直垂を著て身後の榮とせんと、篠原の戦に及んで衆皆敗走せしも、獨り止り奮戦し、手塚太郎光盛の手に討死す、年七十三、今を距る七百四十九年前なり、聞きし人皆感ぜぬものなし、俊成卿述懐の歌に「澤に生ふる若菜ならねど徒らに年をつむにも袖はぬれけり」とあり。今加賀國片山津温泉の西に、首洗池、首掛松、實盛墓等の名所多し、又同國小松町、上本折町の多太神社には戦死の際の兜甲を藏す。

篠原 — 石川縣江沼郡篠原村、字笹原邊。

深山木の其梢 — 詞花集第一卷春歌に載す。題不知源頼政の詠せし歌に「みやま木の其梢とは見えざりし櫻は花にあらはれにけり」とあり。源平盛衰記には深山見花とあり。歌意は

位にありといふ極樂淨土を指す。阿彌陀經に「從是西方過十萬億土有世界名曰極樂」と説けり。

已心の彌陀の國 — 如何なる者も自己の心性を開覺するとき、皆佛性を有するが故に、本來法爾として是れ佛なり。彌陀は十萬億土に淨土を構へ現在說法し給ふと雖も、是れを自心の外に求むべきにあらず、此心即ち佛なり。この見解をなすを已心の彌陀の國といふ。

攝取不捨 — 攝取とは攝め取るの意、佛の衆生に對する慈悲の妙用なり。大無量壽經に、「我當修行攝取佛國清淨莊嚴無量妙土」と云へり。不捨は守護して捨てざるの意、此攝取の作用は佛の光明の力なれば又攝取の光明といふ。

一念稱名 — 一聲の念佛といふに同じ。稱名は佛の御名を唱ふること。

笙歌遙かに聞こゆ云々 — 「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」大江定基入道寂照臨終の時作りし詩。

盲龜の浮木 — 人身の受け難きを、或は佛法の値ひ難きを示す爲に多く諸經論釋に出すところの譬喩なり。例へば涅槃經に人身の受け難きを示して、「生世爲人難猶如大海中盲龜值浮木孔」云々とあり。圓覺經には「浮木盲龜難值遇」と説けり。

長井 — 武藏の長井郷に住みたればいふ。長井は今の都筑郡

山の木に交りし程は櫻とも見えざりしに、花咲きてはまぎるゝ物なしとの意なり。

輪廻妄執 — 輪廻とは罪障ある生類が六道即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上に旋轉し、此處に死し彼處に生じて窮りなきこと車輪の廻りて盡きざるが如きこと。妄執とは生死海の妄相に執着し、其實相を證せず其業力によりて常に六道に輪廻すること。翁さび人などがめそ狩衣 — 「けふばかりとぞたづもなくなる」伊勢物語の歌を借りて、かりそめに現はれたるを咎むるなどの意。

別時の稱名 — 定まりたる時間以外特に念佛修行すること。

法の水 — 池邊の念佛修行につきし法の水といひて、深く頼むにかけし詞。

初夜 — 午後八時をいふ。後夜 — 午前四時をいふ。

所は不退の — 壽命は無量なる義又は菩薩の居所をいふことあり。不退とは梵音「アヴィツルチカ」といひて菩薩の行位をいふ。此行位に三種あり、一に位不退、二に行不退、三に念不退これなり。往生要集には「所定不退永免三途八難三畏壽亦無量終無生老病死之苦矣」と説きあるを見れば、此信念ありて必ず往生を得とのこと。



念々相續する人は——念佛を常に續くる人。

南無といつば——善導支義に曰く「言南無者即是歸命言阿彌陀者即是其行以斯機故必得往生」と説きたり。南無とは梵語にて歸命と譯す。是れに三意あり、一に度、我二に救我、之れ佛に向つて我を濟度したまへ救濟したまへと請ふ意。三に歸命これに二意あり。一は己の生命を捧げて佛陀に歸投する意、二は佛陀の命令に信順する意となり。以て知るを得べし。

何か寶の——珍重すべき太刀も鎧も今は何か寶とすべきの意を、寶の池に云ひかけたので、寶の池とは觀無量壽經にある極樂世界寶樹寶地寶池の事で、淨土の八功德池のこと。

一念彌陀佛即滅無量罪——一度阿彌陀佛を念すれば、即座に無量の罪を滅すること。

廻向發願心——觀經所説三心の一にして、修むる所の善根功德を極樂淨土に回向して彼土に生ぜん願する心。

氣馨れては風新柳の髪を梳り——朗詠集に載す。春暖、都良香の詩句、「氣馨風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚」とあり。

詩意は天氣晴朗風の柳を吹き靡かしたるは髪を梳るに似たり。苔生ひたる岩に浪のかゝるは鬚を洗ふに似たり。といふこと。

故郷へは錦を着て歸る——平家物語第七卷實盛最後の事の條

存ずれば。あたりには誰も見えざる折柄。問ひつ答へつ受けつ流しつ語り給ふを。老若共に奇特に思はれ。拙者に不審仕れとある程に。急ぎ参り此由申さばやと存ずる。唯今参じて候(シテ)我等も疾に参り申すべきを。彼方此方隙を得ず延引迷惑仕候。又只今参る事餘の儀に非ず。誠やらん上人は日中の以後獨り言を御意成さるゝ由申す。餘りに不思議なる御事なれば。拙者にちと尊意を得よかしとあるに付。卒爾ながら是迄伺候致したるが。何とも思し召し合はさるゝ儀は御座なく候か(此間)此間せりふ常の如し。先づ實盛は北國の住人なるが初の程は源氏の侍にて。武藏國長井の庄を御領に給はり。夫より長井の齋藤別當實盛とは申す。然れ共世に順ふ習にて。治承の頃より平家の味方となり。齋藤五齋藤六とて兄弟の男子をいつも主君の御前に付け置いて。別儀なく御奉公申されしが。或時東國へ出陣の時分。此度永々の在陣ならば。隠れなき名を揚げうすると思ひ給へど。平家の軍兵には如何なる天魔も付添ひたるか。末だ敵も見えぬ其先に。水鳥の立つ羽音を聞いて驚き。跡をも見ずに空しく歸陣せられ。其後此篠原合戦の時。實盛は都鄙に名を得し兵なるに依り。大臣殿より錦の直垂を赦され。弓取つての面目是に過ぎじと喜び。如何様今度は討死を心掛け給ひたるか。武器を精華に輕々と拵らへ。都を打立ち當國に下着の刻。義仲は五萬餘騎にて討て登

に記して曰く、「事のたとへの候ふぞかし、故郷へは錦を着て歸ると申すことの候へば何か苦しう候ふべき、錦の直垂を御免候へかし」とあり。中記項羽本紀には、「富貴不歸故郷如衣繡夜行誰知之者」と記したり。

錦の直垂——大將或は大將分ならでは着ざりしもの。もみち葉を分けつつ行けば錦着て——家に歸ると人や見ららん、後撰集に載す。讀人不知の歌とあり。六帖には伊勢の歌とす。

朱買臣——朱買臣は吳の人にして錦の袂を會稽山に翻へし、後漢の武帝に仕へて會稽の太守となれり。

軍諍ず——軍諍は佛語に多くあり、軍あらそひと云はんが如し。即ち軍に強きこと又戦ひ上手とも見られん。

草摺をたたみ揚げて——草摺は鎧より腰のまはりに垂れたるもの。

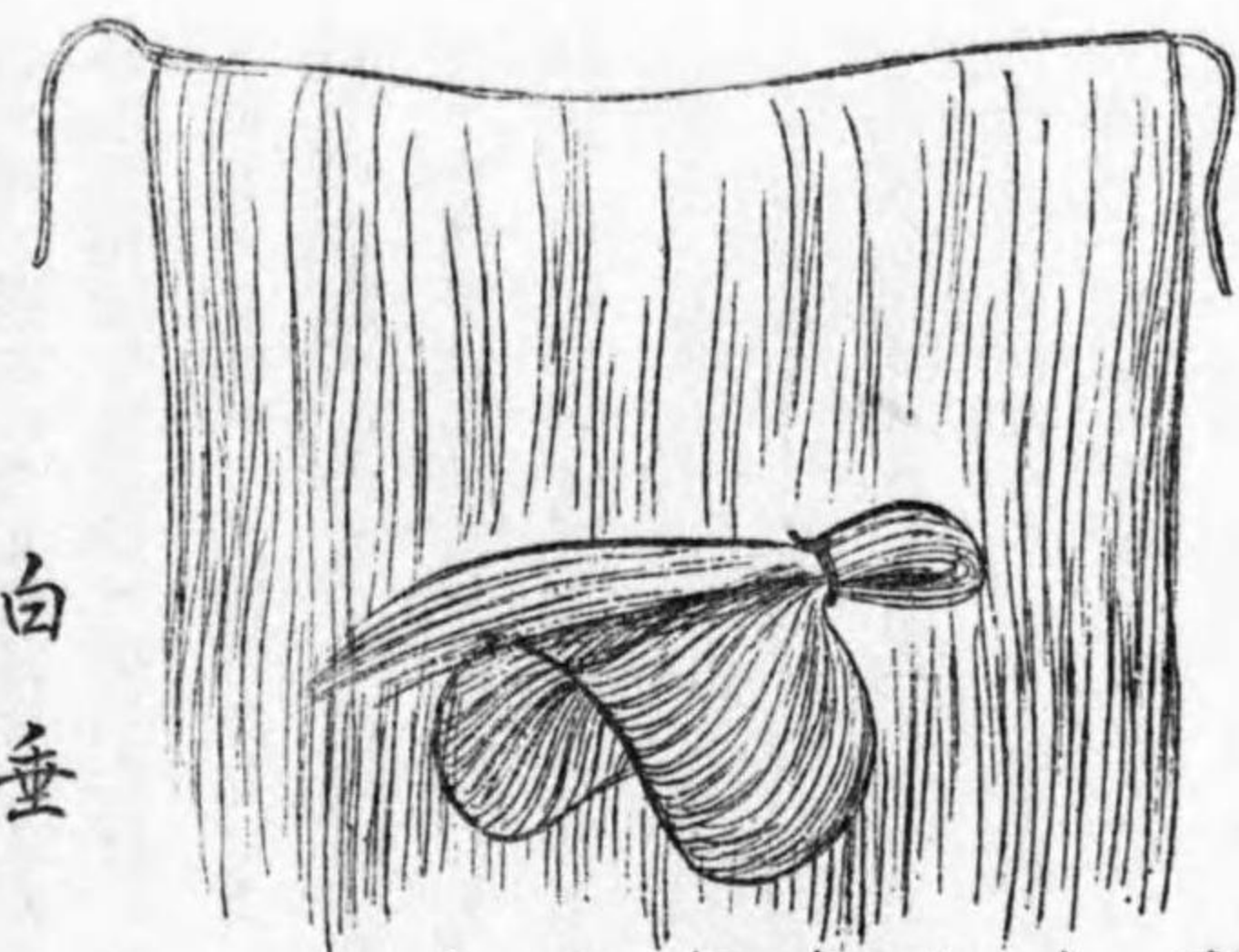
### 問狂言

篠原の里人ワキと問答し、實盛追弔の爲、別時の念佛修業あるべき事を告げて退く。

(口開)是は加賀の國篠原の里に住む者にて候。只今此處へ遊行十六代他阿彌上人の御著きあれば。志の輩は皆々御参り候へや。(中入後)去程に當所の面々申され事に。此中上人は日中の時分物を仰せらるゝを皆々聞くに。座中に人のあるかと

り。是にて戦ひに及ぶと云へど。軍半ば迄は双方五角にありつるが。木曾殿の方には勢強くて味方が少し妻手に見えしを懸れや〜と聲を計りに逸れ共。前方に後れを取りたる武者なれば。下知をも聞かず我先にと敗軍するを。齋藤別當はとくと無念に存せられ。何ともして大將と組まんとたくみ〜敵の中へ破て入り左右へ切廻りしが。光盛に渡合ひ討死ありたると承はる先我等の存じたるは斯の如くにて候(シテ)是は奇特なる事仰せらるゝ物哉。實盛は此篠原合戦に討たれ給ひし故。亡魂現はれ出で。詞を交されたと存する間。篠原の池のほとりへ御出であり。彼の跡を御弔ひあれかしと存ずる。(シテ)さあば其由相觸れ申さうする。やあ〜皆々承り候へ。此中上人は夢現ともなき折節。實盛の亡魂現はれ給へば。篠原の池のほとりに於て。臨時の踊念佛を以て。彼の菩提を御弔ひあるべしとの御事なれば。構へて其分心得候へ心得候へ。





白垂

尉髪

本曲前シテの如く、水衣を着けて出づる尉は、頭に尉髪を結ぶ。尉髪は白きハス毛を以て製せるものなり。

尉にして冠り物ある時、その下に白垂をつく。本曲後シテ梨子打烏帽子の下に垂れ、尉髪と同じく白きハスを以てつくる。



# 實盛

素謡座席唄

ワシキテ  
ワキツレ

ワキツレ僧入  
ケタカクハビヤカニ  
拍子合  
狂言口開

それ西方は十萬億土遠く生まるる  
道ながらこそ己心の彌陀の國

貴賤群集の稱名の聲

日々夜々の法の場  
げにも誠

に攝取不捨の  
誓ひに誰か

残るべき  
獨りなほ佛の持名を

後シテ 齋藤實盛	前シテ 尉	ワキツレ 從僧二人	ワ キ 遊 行 上 人	装束 附(實盛)
面、朝倉尉又ハ笑尉 白垂 白鉢巻 襟淺黄 着附無色厚板 半切 法被 繡紋腰帶 太刀 修羅扇	面、朝倉尉又ハ笑尉 尉髪 襟淺黄 着附無地尉斗目又ハ小格子厚板 茶水衣 緞子腰帶 數珠	角帽子 着附無地尉斗目 白大口 水衣 緞子腰帶 扇 數珠	角帽子 着附小格子厚板 白大口 水衣 緞子腰帶 扇 數珠	

實盛



ワキサミ以下



尋ね見ん。佛の御名を尋ね見ん。  
 おのおの歸る法の場。知るも知らぬも心引く誓ひの網に漏るべきや。知る人も知らぬ人も渡さばや。彼の國へ行く法の船浮かむも安き道とかや。浮かむも安き道とかや。望歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆

三ツ尉サシ上  
ツヨクイ  
拍子三合六

けふもまた紫雲の  
立つてんぞや



来迎す落日の前。あらたよとや。けふもまた紫雲の立つていぞ。や。鐘の音念佛の聲の聞えぬ。さては聽聞も今なるべし。さなまきだに立居苦しき老の波の寄りもつかずは法の場によそそながらもや聽聞せん。一念稱名の聲の

舞臺

二



南無阿弥陀佛



うらには。攝取の光明曇らねど  
 も。老眼の通路なほ以て明らか  
 ならず。よし。少くは遅くとも。  
 らを去る事遠かるまじや南無  
 阿彌陀佛。いかに翁。さても毎日  
 の稱名に怠る事なし。されば  
 志の者と見る處におことの姿餘

人の見る事なし。誰に向つて何  
 事を申すぞと皆人不審。あへ  
 り。けふはおことの名を名乗り  
 ゆへ。これは思ひもよらぬ仰せかな。  
 もとより所は天ぞかる。鄙人なれ  
 ば人がま。やな名もあらばこそ  
 名乗りもせぬ。たゞ上人の御下向



偏に彌陀の來迎なれば可ツヨクころぞ  
 長生ナガシキしてこの稱名の時節トキセツに逢  
 ふ事コト盲亀メクラカメの浮木ウキ優曇曇華ウツトククワの  
 花ハナ侍ら得たる心地ココロして老の幸サイハレひ  
 身に越え悦びヨロコビの浼袂ニハダに餘るあまこれ  
 ばその身ながら安樂國アノクニに生ま  
 るかと無比ヒトシの歡喜ガシをなす處ところに

輪廻リンエ妄執マウシの箇エ浮ブの名ナを又改め  
 て名乗らん事コト口惜クナシしうこそゆ  
 へとよヲキげにげに翁オヤナの申す所  
 ことわり至極シゴクせりさうりながらオウ一つ  
 は懺悔ザンケの廻心ケシともなるべしナた  
 おことが名を名乗りのゆへシテおつて  
 は名乗らでは叶カナひゆまどモリトまきか



ワキサラリメ なかなかの事急いで名乗りゆへ

ミテ閑カニ さらば御前なる人を除けられ

ゆへ近う寄りて名乗りゆへ

ワキサラリメ もとより翁の姿餘人の見る事

はなけれども所望ならば人をば

除くべし近う寄りて名乗りゆへ

昔長井の齋藤別當實盛は



昔長井の齋藤別當 實盛は

この篠原の合戦に討たれぬ聞し

召し及ばれてこそゆらめ ワキサラリメ それに

平家の侍ら取つての名將 シヨオ その

軍物語は無益な事おことの名を

名乗りゆへ シテ気ラカケ閑カニ いやそれこそその

實盛はこの御前なる池水にて

鬢髪までも洗はれしとなり 抑ヘメニ それに



その執心シツシン残りけるか。今もこのあ  
 たるの人は幻マロシの如く見ゆると  
 申しゆワキカケテ。さうて今も人に見ええゆか  
 深山シテ中柳ヘテ木のその梢サエは見えざり  
 櫻は花アライに顯アライれたる。老木オノキをそれ  
 とは覺確カリぜよ。不思議サラシメやさうては  
 實盛シテ中柳ヘテの昔サカを聞サカきつる物語サカ人の

よぞと思サカひしに身サカの上サカなりける  
 不思議サカさうては詞抑ヘメニおこもは實盛  
 のその幽靈サラシメにてましますか  
 われ實盛シテ抑ヘテが幽靈サカなるが魂コシは冥  
 途ドにありながら。魄ハクはその世に  
 留ドまりて早カル上ラなほ執心シツシンの濶クハ浮フの  
 世シテ詞心持ハに二百餘歳ヨサイの程サカは經サカれども



早サラリメ上ラ

浮かみもやらで篠原の池の  
あだ波よるとなく  
晝サラリメとも

わかで心の圖の 夢抑ヘテともなく

現サラリメともなき 思シテひをのみ 篠原中ニ

の草葉カサハの霜シロの翁オキナさびカサ 草葉カサハの

霜シロの翁オキナさびカサ 人ヒトな処トコロめメそ假カリ初ハジメに

現シテれ出イでたる實盛サカシがカ名ナを洩ヒらし



幼コとナりテてセにシり

早高クカル上ラ

拍子ウチ三ミ合アヒハズ

給タマふナよシとシき世語セゴも死シかシとシて  
御前ミマエをタ立ちタ去サりテ行ユくカと見ミれば  
篠原ホトリの池イの邊ヘにて姿シはシ幻マヨとなりテ  
失ウせニにケりシ幻マヨとなりテ失ウせニにケりシ中入間  
いハざヤ別時ベツジの稱名セイメイにてカの幽ユ  
靈レイをヒ吊ツはシんト待マ詠エイ 篠原ホトリの池イの邊ヘ  
の法ホウのキ水ミヅ池イの邊ヘの法ホウのキ水ミヅ深コく



南無阿彌陀佛



太鼓ヲ合  
拍子ニ合ス  
後ニ實盛中  
抑ヘテ重シモリ

ぞ頼む稱名の聲澄みわたる吊ひ  
の初夜より後夜に至るまで心  
も西へ行く月の光と共に曇り  
なき鉦を鳴らして夜もすがら  
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛  
極樂世界に行きぬれば永く苦  
界を越え過ぎて輪廻の古里隔

命は無量壽佛となり



阿彌陀といつば



有難ヤ



たりぬ歡喜の心いくばくぞや所は  
不退の所命は無量壽佛となり  
頼もしや念々相續する人は  
念々毎に往生す南無といつば  
即ちこれ歸命阿彌陀といつば  
その行その義を以ての故に必ず  
往生を得べしとなり  
ありがたや

實盛

實盛



早カニ上  
ハラズ  
拍子三合ハズ

不思議やな白みあひたる他の面  
に。幽かに浮かみ寄る者を見れば  
ありつる翁なるが甲冑を帯する  
不思議さま埋れ木の人知れぬ  
身と沈めども心の他のいひ難き  
修羅の苦患の數々を浮かめて  
たばせ給へとも  
これ程に目の



○小謡

その出まは花やかなら

あたりなる姿言葉を餘人は更に  
見も聞きもせでたが上人のふ  
明らかに見るや姿も残りの雪の  
髪鬚白き老武者なれども  
その出でまは花やかなる  
殊に曇りなき月の光  
の影  
○圖からぬ夜の錦の直垂に  
○歌同  
引立テ確カリ  
○拍子三合





黄金作りの太刀

元へ辰シ  
 夜の錦の直垂に。萌黄白ひの鎧  
 着て。黄金作りの太刀。今の身  
 にては。それとて。何お寶の池の  
 蓮の臺こそ。寶なるべけれ。げに  
 や疑はぬ。法の教へは朽ちもせぬ。  
 黄金の言葉多く。せは。などかは至  
 らざらん。まきなどかは。至らざらん。まき。



クリ地より詰まで

ミテリ上  
 拍子三合  
 同  
 即ち廻向發願心。心を残す。事  
 なかれ。時至つて。今宵逢ひ難  
 き。法を受け。慚愧懺悔の  
 物語。なほも昔を忘れかねて。忍  
 ぶに似たる。篠原の。草の陰野の  
 露と消え。有様語り申すべし



シテ諸カケテ重シモリ  
○獨吟 ○

源氏の方カタに平塚ツツカの太郎タロウ光盛ミツモリ。  
木曾殿キシカワクの御前ミマエに参りて申す  
やうヨ。光盛ミツモリこそ奇異オノミヤビの曲者クマシと組ん  
で首取トつてゆへ。大将タウシかと思れば  
續ツく勢セもなし。又侍サムライかと思へば  
錦ニシキの直垂ヒタタレを着キたり。名乗ナノリれ名乗ナノリ

れと責セむれども終ツに名乗ナノリらず。  
聲コエは坂東バンドウ聲コエにてゆと申す。木曾キソグ  
殿ドあつばれ長井ナガイの齋藤サイトウ別當ベツドウ實サネ  
盛モリにてやあるらん。然らば鬢ヒゲ鬢ヒゲ  
の白ハク髪カミたるべきが。黒クロきこそ不審フシン  
なれ。樋口ヒグチの次郎ジロウは見知りたるら  
ん。とて。名乗ナノリされ。かば。樋口ヒグチ参り





たゞ一目みて

たゞ一目見て涙をばらはらと流  
 いてあな無慙やな。齋藤別當  
 にてゆひけるそや。實盛常に申  
 は六十に餘つて軍をせば若  
 殿原と争ひて先をかけんも大  
 人氣なし。又老武者とて人々に  
 あなづられんも惜しかるべし。

○切迄雜子



水の傳も影うつる

鬢鬚を墨に染め若やぎ討死  
 すべきよし。常々申しゆひが真に  
 染めてゆ。洗はせて清覽ゆくと。  
 申しもあへず首を持ち 御前  
 を立つてあたりなるこの池波の  
 岸に臨みて水の緑も影うつる。  
 柳の糸の枝垂れて

上歌同

氣霽れ



髪を洗ひてみれば



皆感涙とぞ



○曲獨吟  
仕舞

ては風新柳の髪を梳り氷消  
 えては波舊苔の鬚を洗ひて  
 見れば墨は流れ落ちてもその  
 白髪となりけりけに名を惜し  
 むら取は誰もかくこそあるべけ  
 れやあらやさそ皆感涙を  
 ぞ流しける。又實盛が錦の直垂

を着る事私ならぬ望みなり。實  
 盛都を出て一時宗盛公に申す  
 やう。故郷へは錦を着て歸ると  
 いへる本文あり。實盛生國は  
 越前の者にてゆひりが近年  
 市鎮に附けられて武藏の長井  
 に居住住りゆひき。この度北國に

實盛

三



も免あれと望みしかは



罷り下りてゆは。定めて討死  
 はるべし。老後の思ひ出されに過  
 ぎし。免あれと望みしかは。赤  
 地の錦の直垂を下し賜はりぬ  
 然れば古歌にももみぢ葉と分け  
 つ行けば錦着て家に歸ると  
 人や見るらんと詠みしもこの

會誓山にひるがし



本文の心なり。されば古の朱買  
 臣は。錦の袂を會誓山に翻し  
 今の實盛は名を北國の巷に揚  
 げ。隠れなかりし弓取の名は末  
 代にありあけの。月の夜すがら懺  
 悔物語申さん。げにや懺悔の  
 物語。心の水の底清く濁りを残り

名は末代にありあけの







手塚めに隔られし

給ふなよ。その執心の修羅の道。  
 めぐりめぐりて又そに木曾と  
 組まんとなくみを。手塚めに  
 隔てられし。無念は今にあり  
 續くつはもの誰々と。若乗る中に  
 もまづ進む。手塚の太郎光盛  
 郎等は主を討たせど。かけ隔



鞍の前輪におしつけて

たりて實盛と。押し並べて組む  
 處を。あつはれ。おのれは日本一  
 の剛の者ど。こんでうすよとて。  
 鞍の前輪に押しつけて。首かま  
 切つて。捨て。げり。その後手塚  
 の太郎。實盛が弓手にまはりて。  
 草摺を。畳みあげて。二刀刺す



どうとおらけるが



同

處をむずと組んで二匹が間にさう  
 と落ちけるが老武者の悲しきは  
 軍にはしつあれたり風にあある  
 枯木の力も折れて手塚が下に  
 なる處を郎等は落ちあひて  
 終に首をば搔き落されて後原  
 の土となつて影も形もなき跡

郎等はあひて



の影も形も南無阿彌陀佛吊  
 ひてたび給へ跡吊ひてたび給へ



# 楊貴妃

羅竹氏信作

## 梗概

唐の玄宗皇帝、その寵姫楊貴妃を馬鬼が原にて殺されてより戀慕止み難く、方士をしてその魂魄の在りかを尋ねしむ。方士(ワキ)天上黄泉を遍く覓めしも見えざりしかば、常世の國蓬萊宮に渡り、この所の者の教へに従つて、太真殿に到り楊貴妃を尋ねれば、貴妃(シテ)九華の帳を排し玉簾をかゝけて出で来る。方士、貴妃亡き後の皇帝の御歎きを傳へ、貴妃に逢ひし證に形見の品を請ふ。貴妃乃ちその挿せる玉の釵を取りて與へしに、方士、かゝる世に類ある物よりも、帝と人知れず契り給ひし言葉を承りたしといふ。貴妃、これも理なりと思ひて、七夕の夜、天に在らば願はくは比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは連理の枝とならんと誓ひし私語を洩らし、われはもと上界の仙女なりと身上を細々と語りて、霓裳羽衣の曲を舞ふ。やがて方士かの釵を携へて都に歸れば貴妃は涙ながらに留まる。

曲柄 三番目 壹物  
季節 八月  
稽古 三級  
所 仙界蓬萊宮太真殿

## 謡ひ方

楊貴妃、大原御幸、定家の三番は、本三番目中に在りても最も品位の高き能とす、故に品位を主として戀慕の情を旨とし優麗に謡ふべし。

△シテ 能にては始め作り物の中にて謡ひ出すなれば、其心持にて何心なく述懐の意にて調子を控へめに、閑かに重んじりと運びを付けて謡ふ、ワキとの掛合にて氣をかけ柔かく、ワキとの連吟はしつくりと合せ、初同後の掛合は、しつくりと閑かに落着を見せ、ロンギはうつきりと引立つ心、物着後の「何事も」より氣を變へ朗かに伸んびりと艶麗に、クリは大きくサシは閑かに、舞跡のワカは花やかに、「戀しき昔の物語」と締めて謡ふべし。

△ワキ 勅使と雖も餘り位を持つは宜しからず、閑かに確かりと謡ひ出し、詞の文句に心付け、道行は閑に伸んびりと「有し教へに」と氣を替へどつしりと、シテとの掛合は氣を掛けシテよりさらりと謡ふべし。

△地 初同は調子高くならぬ様に閑にしつとりと、二の同は



閑かろうつきりと、ロンギはさらりめに次第より閑めて大き  
く、サシクセは閑かに落着よく、ワカの跡は暗れやかに「戀  
しき昔の」とシテの調子を受けて閑かに、以下段々と運び  
「浮世なれば」より漸次に閑めて諳ひ納むべし。

能の異式（小書）

甲掛り！序の舞の掛りが違ふなり。

彩色舞！舞の外にイロエが入るなり。

臺留！一切に作り物の中に入り残る留となる。

語釋

長恨歌——本作曲の根源材料なれば左に其原文を掲ぐ。

漢皇重色思傾國、御宇多年求不得、揚家有女初長成、  
養在深閨人未識、天生麗質難自棄、一朝選在君王側、  
回頭一笑百媚生、六宮粉黛無顏色、春寒賜浴華清池、溫泉  
水滑洗凝脂、侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時、雲鬢  
花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、從此君  
玉不早朝、承歡侍宴無閑暇、春從春遊夜專夜、後  
宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、金屋粧成嬌侍夜、玉樓  
宴罷醉和春、姊妹弟兄皆列士、可憐光彩生門戶、遂令  
天下父母心、不重生男重生女、驕宮高處入青雲、仙  
樂風飄處、聞、緩歌慢舞凝絲竹、盡日君王看不足、漁陽

風吹仙袂飄飄舉、猶似霓裳羽衣舞、玉容寂寞淚闌干、梨  
花一枝春帶雨、含情凝睇謝君王、一別音容兩渺茫、昭  
陽殿裏恩愛絕、蓬萊宮中日月長、回頭下望人寰處、不見  
長安見塵霧、唯將舊物表深情、鈿合金釵寄將去、釵  
留一股合扇、釵擘黃金合分鈿、但令心似金鈿堅、  
天上人間會相見、臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知、七  
月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地  
願作連理枝、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期、  
玄宗皇帝——唐の六代目の天子。

方士——仙術に通じたる人。

楊貴妃——支那唐の玄宗皇帝の寵妃にして、姓は、楊小字を玉  
環、後太眞と號す、貴妃は官名なり、蜀州の司戸楊玄琰の女  
なり、幼時父母に離れ孤となる、叔父河内府士曹楊玄珪が家  
に養はれるが、後玄宗の第十八の御子壽王の妃となり、開  
元二十四年武惠妃の薨するや召されて入内す、歌舞を善くし  
巧に帝の意を迎へ、寵幸皇后を凌ぎ、欲する處得られざるは  
なく、天寶四年貴妃に進められ、父玄琰に齊國公を追贈せら  
れ、骨肉概ね大官となり、寵臣安祿山と醜聲あり、十四年安  
祿山の亂に依て、帝貴妃と共に蜀に赴く、中路馬嵬の驛に入  
る、時に六軍の將士飢へ疲れ怒て反動す、陣玄禮思ふ様、禍  
本楊國忠が所存なりと將士を招て國忠を誅す、然る上は貴妃

鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲、九重城闕煙塵生、千乘萬騎西南  
行、翠華搖々行復止、西出都門百餘里、六軍不發無奈何、  
宛轉峨眉馬前死、花鈿委地無人收、翠翅金雀玉搔頭、君王  
掩面救不得、回首血淚相和流、黃埃散漫風蕭索、雪樓綉紵  
登劍閣、峨嵋山下少人行、旌旗無光日色薄、蜀江水碧  
蜀山青、聖主朝暮暮情、行宮見月傷心色、夜雨聞鈴斷  
腸聲、天旋地轉回龍馭、到此躊躇不能去、馬嵬坡下  
泥土中、不見玉顏空死處、君臣相顧盡沾衣、東望都  
門信馬歸、歸來池苑皆依舊、太液芙蓉未央柳、芙蓉如面  
柳如眉、對此如何不淚垂、春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉  
落時、西宮南苑多秋草、宮葉滿階紅不掃、梨園弟子白髮  
新、椒房阿監青蛾老、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠、  
暈々鐘鼓初長夜、耿耿星河欲曙天、鶯鶯瓦冷霜華重、翡翠衾  
寒誰與共、悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢、臨邛道士  
鴻都客、能以精神致魂魄、爲感君王展轉思、遂教方  
士殷勤覓、排風馭氣奔如電、升天入地求之偏、上窮  
碧落下黃泉、兩處茫茫皆不見、忽聞海上有仙山、山在虛  
無縹渺間、樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子、中有仙人  
字太眞、雪膚花貌參差是、金闕西廂叩玉扉、轉教小玉報  
雙成、聞道漢家天子使、九華帳裏夢魂驚、攬衣推枕起徘徊、  
迴、珠箔銀屏迤邐開、雲鬢半偏新睡覺、花冠不整下堂來、

も供奉にあづかるべからずとて帝に乞ふて高力士、貴妃引立  
て佛堂の方に連れ行き羅の中にて縊殺し、尸を茵に裏み西郭  
の外一里ばかりの道の側に埋む、時に妃の年三十八、今を距  
る約千七百七十六年前なり。

上碧落——上は天上。

下黃泉——下は地中。

蓬萊宮——仙界の宮殿のこと。山海經に曰く「蓬萊海中に在  
り上に仙人の宮室あり皆金玉を以て之を造る」と説きたり。  
尋ねゆくまほろしもがな——源氏物語桐壺に「なき人のすみ  
か尋ね出でたりけむしるしの釵ならましかばとおもほすも、  
いとかひなし」とありて、歌に「尋ねゆくまほろしもかな傳  
にても魂のありかをそことしるべく」之れ時の帝が桐壺の更  
衣の空しくなりたるを嘆き、揚貴妃の長恨歌によそへて詠み  
たるもの。

常世の國——神界又は仙界にて永久不變の國。

七寶——諸經論の所説に小異あるも、法華經授記品には「金  
銀、瑠璃、磔磔、碼碯、眞珠、玫瑰」七寶合成とあり。無量壽  
經には樹に就て七寶を説く。「金、銀、瑠璃、玻璃、珊瑚、  
碼碯、磔磔。」智度論には有七種寶「金、銀、毘琉璃、  
頗梨、車渠、馬瑙、赤眞珠」とあり。

長生驪山——長生殿や山宮の意。



太真殿 — 楊貴妃の魂の住む處。

昔は驪山の — 皇帝楊貴妃と同車して驪山の華清宮に遊びしこと。

九華の帳 — 色の模様を繡したる帳九枚を重ねて寢室の廻りにかけしもの。

玉の簾を — 「珠の箔銀の屏進遷として開く」にあたる。

寂寞たる御眼の内に — 「玉の容せきばくとして涙欄干たり」にあたる。

梨一花枝 — 「梨花一枝はる雨を帯ぶ」とあり。

太液の芙蓉未央の柳 — 太液は禁中の池の名、芙蓉は蓮の花未央は御殿の名。

六宮の粉 — 唐土のさだめに皇后は正寝一蕪寢五とありて、之を併せて六宮といふ。即ち奥御殿のこと。

玉の釵とりいてて — 長恨歌の「細合釵寄せもつて去らしむ」にあたる。

其初秋の七日の夜 — 七月七日長生殿より来る。

二星に誓ひし — 二星は牽牛織女（男女の星）を指す。長恨歌傳に「秋七月牽牛織女相見る夕（中略）天を仰ぎて牛女の事を感じひそかに心に相誓ふて願はくは世々夫婦とならんと言ひ畢つておのゝ鳴咽す」とあり。

天にあらば — 比翼の鳥はめいゝに一つづゝ羽をもちて、

二十五となる。之を有と稱する所以は、是等の諸界は因果相續して果中未來の果を結ぶべき因を具有するが故なり。

北州の千年 — 北嶺單越州のこと、此國に住む身は壽一千歳に滿つ。と西城記に説く。

五衰 — 天上界の樂は人間世界に勝ること千萬なりと雖も猶此五衰あり。而して五衰には大小の二種あり。大の五衰とは一に衣服垢穢し、二に頭上の花萎み、三に液流汗し、四に身體臭穢し、五に本座を樂まざること。小の五衰とは一に樂聲起らず、二に身光忽ち滅し、三に浴水身に著き、四に境に著して捨てず、五に眼目屢々瞬く是れなり。これ天人の果報盡滅の相なるが故に五衰といふ。

借老同穴 — 詩經の語、年老ゆるまで共にそひ、死なば同じ穴に葬らんとの意。

さらぬ別れのなかりせば — 古今集第十七卷雜歌上に載す。在原業平の詠みし歌「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため」これ業平が母の許より「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよゝ見まくほしき君かな」とありしに返歌せし歌。

袖うち振れる — 源氏物語紅葉賀に「物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖打ち振りし心知りきや」とあり。

必ず相ならび一體の如くなりて飛ぶ鳥。連理の枝は二本の木相接して一つになりたる枝。

私語 — 他人に知らせぬ密話。

其身は馬嵬に留まり — 楊貴妃の死せし土地の名。

原詩に「馬嵬坡のもと泥土の中に玉顔を見ずして空く死せしし處」とあり。

そよや霓裳羽衣の曲 — そよやは驚破のこと、即ち驚の聲。

霓裳羽衣の曲は玄宗皇帝ある夢心地に天上宮殿に遊び、天人の音樂を聞きて之に擬して作れる曲。

胡蝶 — 高麗樂の名。

二十五有 — 迷界を總括したる名目、四州、四惡趣、六欲天梵天、無想天、那含天、四禪天、四無色天これなり。四洲とは須彌山の四方にある東弗婆提、西瞿耶尼、南閻浮提、北嶺單越をいひ、四惡趣とは地獄、餓鬼、畜生、修羅をいひ、六欲天とは四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天をいひ、梵天は色界初禪天にある天處にして大梵王と稱へらるゝもの、無想天は色界第四禪天にあつて、或種の外道に眞の涅槃界なりと誤認せらるゝ世界、那含天は同じく第四禪天の一部にして小乗教の不還果を證したる人の生ずる處。四禪天とは初禪天、二禪天、三禪天、四禪天之れなり。四無色天とは空處、識處、無所有處、非非想處なり。以上通じて

### 間狂言

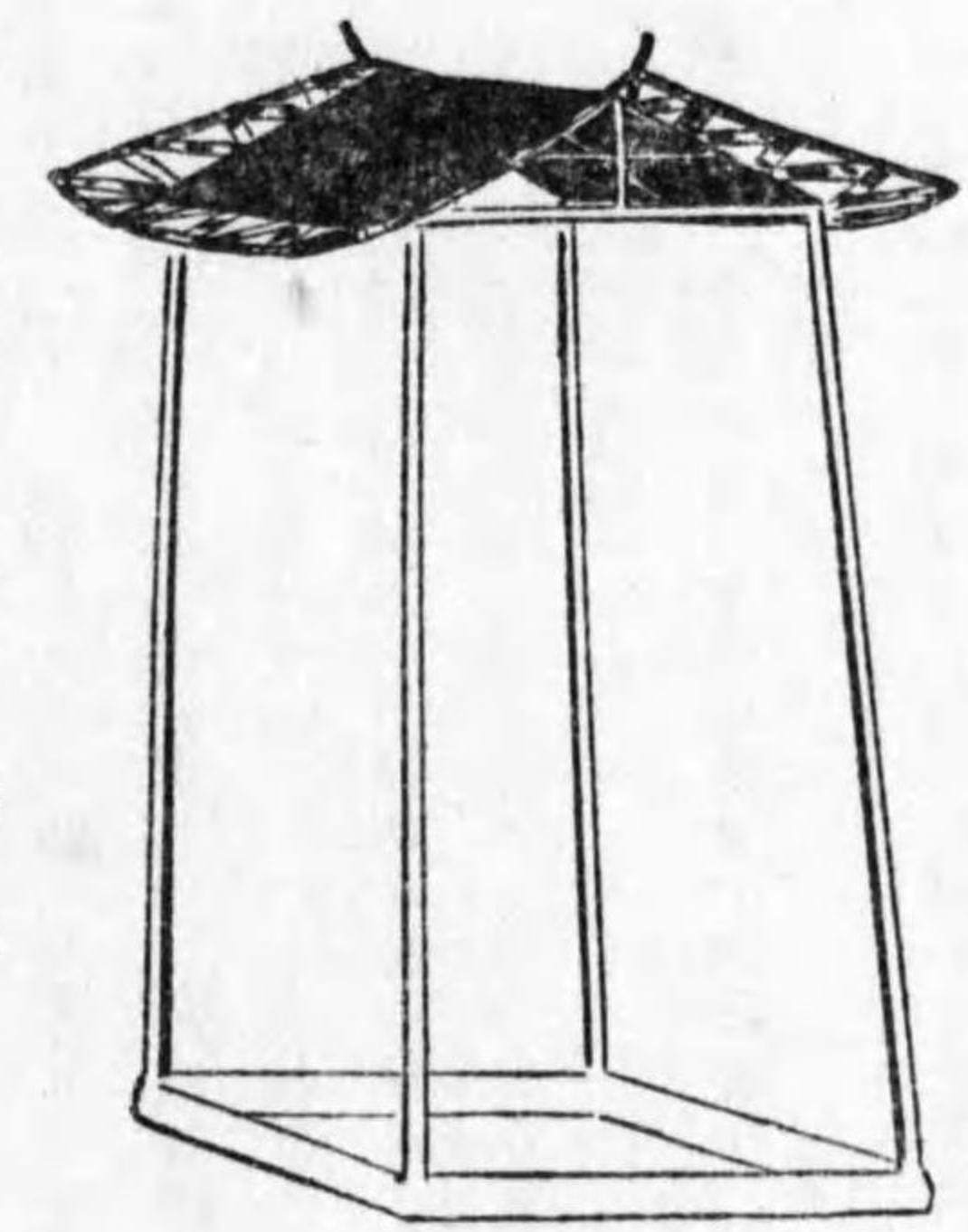
當世の國の者ワキの尋ぬる楊貴妃のことにつき、玉妃といふ方が居らるゝがそれが楊貴妃ならんと教ふ。

(シキク) 誰にて渡り候ぞ (シキク) 此所に楊貴妃と申すは御座無く候去乍ら。唐土よりと仰せらるゝに付て思ひ出だした。爰に玉妃と申す御方の。明暮れ唐土戀しや越し方戀しやと仰せ候が。若し左様の人にてばし御座候か。(シキク) あれに見えたる森の内に宮造り數多候中にも。太真殿と打ちたる額の内にて玉妃と御尋ね候へ(シキク) 尤に候。



小宮

雜子方着座すれば後見小宮を出して大小前に置き振う。

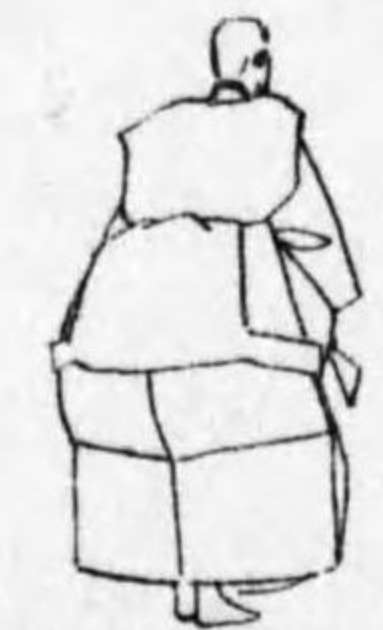


平生は切妻を側面にすれば、本曲にては正面にす。これ仙宮の常とかはれるを理さんとしてなり。この例は他に「和布刈」あるのみ。

作 物	シ	ワ	装束附 (楊貴妃)
	テ 楊貴妃	キ 勅使方士	
小宮	着附摺箔 胴箔腰帶	面、若女 鬘 鬘帶 襟白二	着附厚板 側次又ハ法被 白大口
	緋大口 唐織坪折	繡紋腰帶 扇	
	鬘扇 天冠		

楊貴妃

素謡座席順  
ワシキテ



ワキ次身

早勅使上  
ヨワク  
拍子ニ合

わがまだ知らぬ東雲のわがまだ  
 知らぬ東雲の道をいづくと尋  
 ねん 詞 下シシワト  
 これは唐土玄宗皇帝に  
 仕へ申す方士にてい。さうてもわが  
 君政正しくまします中、色  
 を重んじ、艶を専らと給ふ



により。容色無雙の美人を得  
たまふ。楊家の女たるによつて  
その名を楊貴妃と號す。然れ  
どもさるる子細あつて。馬冤が原  
にて失ひ申して。餘りに帝歎  
かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを  
尋ねて。冬れとの宣旨に任せ。



ワキ詞より通行まで

上碧落下黄泉まで尋ね申せ  
ども。更に魂魄のありかを知らず  
ゆゑに。未だ蓬萊宮に至らずゆ  
程に。この度蓬萊宮にと急ぎゆ  
尋ね行く。幻もがなつてはても  
幻もがなつてはても。魂のありか  
は。そこも。波路を分けて行く

道行上系

ヤ



舟のほのかに見えし島山の草  
 の假寝の枕ゆゑ常世の國に着ま  
 じけり常世の國に着まじけり  
 急ぎの程に蓬萊宮に着きて



ゆこの所にて安く寝ねばやと  
 存じぬ狂言ありし教へに随つて  
 蓬萊宮に来て見れば宮殿盤が

とてさらば邊際もなく莊嚴  
 魏ごとしてさながら七寶をちり  
 ばめたり漢宮萬里の粧ひ長  
 生驪山の有様もこれにはさらに  
 なぞらふべからずあら美一の  
 所やな又教への如く宮中を見  
 れば太真殿と額の打たれたる



宮あつまづこの所に徘徊し事

の由ともうかはるやと存じぬ

昔は驪山の春の園に共に眺めし

花の色移れば変わる習ひこそ今

は蓬萊の秋の洞に獨り眺むる

月かげも濡る顔なる袂かな

あら恋の古やな 唐の天子

三女カレ未 困カニ重シモリ

唐の天子の物の後



の勅の使。方士これまで参りたり。

玉妃は内にまゝますか なに唐

帝の使とは侍しにこゝに來れ

るぞと丸華の帳を押し除けて。

玉の簾をあげつ 立ち出で

給ふ御姿 雲の鬢づら 花の

顔ばせ 寂寞たる御眼の内



○小謠



顔色のなきも埋や

涙ナミダをヲ浮ウかカめメさサせセ給タマへヘばハ 上歌同 梨リ花ハ  
 枝エ雨アメをヲ帯オびビたタるル粧シひヒのノ太タイ液エツのノ芙フ蓉ロウのノ  
 帯オビびビたタるル粧シひヒのノ太タイ液エツのノ芙フ蓉ロウのノ  
 紅ベニ未ミ央ヤウのノ柳ヤナギのノ緑キナンドもモこコれレにニはハいイか  
 でデ優マるルまマまマげゲにニやヤ六ロク宮クのノ粉コ黛タイ  
 のノ顔カ色シヨクのノ無ナきキもモこコとトわワりリやヤ顔カ  
 色シヨクのノ無ナきキもモこコとトわワりリやヤ 口平詞カハル心裕ニいイかカにニ

申しよコトげケぬヌさサもモ后コウ宮キヤウ世セにニ  
 まマまマしシ時トキだダにニもモ朝アサ政シヨウはハ怠オコトク  
 りリ給タマひヒぬヌ況キヤウんンやヤかカくクなナらラせセ給タマひヒ  
 てテ後ナチだダもモひヒたタすスらラのノ御ミコト歎ナゲまマにニ  
 今イマはハ御ミコト命イノチもモあアやヤうウくク見ミえエさせセ  
 給タマひヒてテぬヌ然シカれレはハ宣ノボ旨シにニ任マカせセられレ  
 まマでデ尋タズねネ参マりリ御ミコト姿スガタをヲ見ミ奉ホウるル



中ノシノ関カニ

拍子合

事○た○ぐ○これ君の御志○浅○から○ざ○  
りし故と思へば○愈々御痛○は○う○  
こそゆへ○に○げ○に○げ○に○汝が申す如く

今はかひなき身の露の○ある○  
にもあらぬ魂○のありか○と○それ○  
まで尋ね給ふ事○御情○には似○  
たれども訪ふ○に○つ○ら○よ○の○ま○さ○り

ワヤカル上

ぐ○さ○かれかれなら○ば○な○か○な○か○の○  
便りの風は恨め○し○や○又今更○の○  
戀慕○の涙○舊里○を思○ひ○魂○を消○す○  
急ぎ歸りて奏聞せん○さ○り○なが○  
ら御形見○の物○を○たび○給○へ○これ○  
こそありし形見○よ○と○て○玉○の○釵○





方士に興へたひけれは

敢り出でカル上未。方士ホオに興へたひけれは  
 ればワキいウケテやホよホこれホは世の中ホカに  
 たぐひあるべき物なればいかでか  
 信じ給へべき。御身と君と人知れ  
 ず。契り給ひ一言の葉あらば。  
カル上未 それを證シに申すべし。げにげに  
 これも理コトワリなり。思ひぞ出づるわれも



比翼の鳥とならん



今もれむる涙かな

また中サリ。その初秋アラスの七日トの夜ヨ二星ヒに  
 誓チひカ一言コトの葉ハにもニ天カにア在アらニば  
 願イはカくニはニ比翼ヒの鳥トとなルらニんト地チに  
 在アらニばニ願イはカくニはニ連理レンの枝エとなルら  
 んと誓チひカ一言コトとシ密ヒかにニ傳ツへトよヤ。  
ササ私語シゴトなれどもサ今イマ涙ナミれル初ハジメむるハ涙ナミかな  
サされどもサ世セの中ノのチ。されどもサ世セの





中の流轉生死の習ひとて。その  
 身は馬嵬に留まり魂は仙宮に  
 至りつ。比翼も友を恋ひ獨り翅  
 をかたき。連理も枝朽ちて忽ち  
 色を變ずとも。同ド心の行方  
 ならは終の逢瀬を頼むぞと語り  
 給へやサキさらばといひて出舟の

ともなひ申し帰るさそ。思は嬉  
 しさのなほ如何ならんその心われ  
 は又。なたなかなかに三重の帯廻り  
 逢はんも知らぬ身によしさら  
 ば暫し待て。ありし夜遊をなす  
 べ甲 地上げにや驪山の宮の裡。月  
 の夜遊の羽衣の曲ミテ。そのかざり







昔にたれうき昔



又此島に唯一人



諸仙たるが。性昔の因ありて。假  
 に人界に生まれ來て。楊家の深  
 窓に養はれ。未だ知る人なかりしに  
 君聞し。召されし。急ぎ召し出たり  
 后宮に定め置き給ひ。偕老同穴  
 の語ひも縁盡きぬれば。後らに  
 又この島に唯一人。帰り來りて

静かにたれうき昔



すむ水の。あはれはかなき身の露  
 の。たまさかに逢ひ見たり。静かに  
 語れ憂き昔。さるにても思ひ出  
 づれば恨みある。その文月の七日の  
 夜。君とかはせし。睦言の比翼連理  
 の言の葉もかれがれに。なるよめごと  
 の。筈の一夜の契り。だに名残は思ひ





千代も人にならぬ

習ひなるにまゝてや年月別れて程  
 経る世の中にさらぬ別れのなかり  
 せば千代も人には添ひてまじよし  
 それとも遁れ得ぬ會者定離  
 ぞと聞く時は逢ふこそ別れなりけれ  
 羽衣の曲序之舞  
 羽衣の曲稀にぞ  
 返す少女子が袖うち振れる心

地上 気力多クアリ

拍子合 返す少女子が袖うち振れる心

同上

袖うち振れる心



戀しき昔の物語

著しや心著しや 戀しき昔の物  
 語 戀しき昔の物語 盡くせば  
 月日も移り舞のしるしの釵又  
 賜はりて暇申してさらばとて勅  
 使は都に歸りければ さらばとて  
 もさるにても 君にはこの世逢ひ  
 見ん事も蓬が島つ鳥浮世なれ



木曾女



ふし沈みてぞ

ども恋や昔はかなや別れのどこ  
よの臺に伏し沈みてぞ留まり  
ける。

### 玉葛

岡竹氏借作

曲柄 四番目(略三番目)  
季節 九月  
稽古願 三級  
所 大和國磯城郡長谷寺

### 梗概

諸國遊歴の僧(ワキ)奈良の社寺を拜み廻りたる後、初瀬寺に詣でんとて初瀬川邊に到りしに、山川の底淺くしてしかも漲る岩間傳ひを、小舟に掉さして来る女(シテ)あり。如何なる人ぞと問へば、たゞ初瀬寺に参る者なりと答へ、僧を案内して山の紅葉を賞しつゝ御堂に参り、更に二本の杉に導く。僧、この所の古歌「二本の杉の立所を尋ねずは」の謂れを尋ねれば、源氏物語、玉葛内侍が筑紫より免れ上りてこの寺に詣でし時、その母夕顔の侍女右近が参り合はせて、奇しき再會を喜びて詠める歌なりと語り、かくいふ身が玉葛の幽靈なりとほめかして、姿を隠せり。(中入)  
僧あはれを催して、夜もすがらかの跡を弔へば、玉葛(後シテ)現れ出でて、思ひに悩み、心亂れしわが身上を歎きしが、遂に妄執を翻して、菩提の道に入ると見て、僧の夢は覺めたり。

### 謡ひ方

源氏物の一つにて浮舟と似し曲なり、四番目物なれど略して三番目にも用ゆる曲なれば、位は總じて重くなく、閑雅に上品に謡ふを宜しとす。  
△シテ 始めの一聲の出は、さらりめに朗かに謡ひ出し、サシも運びよく、ワキとの問答は閑かにしつとりと、クリ跡のサシも閑かにロンギは朗かに謡ふ。  
△後シテ 出は調子を抑へて品よく閑に謡ひ出し、以下緩急多く、カケリ跡は伸んびりと花やかに、謡方の傍記をよく見て謡ふべし。  
△ワキ 旅僧なれば餘り位を持たず、重くならぬ様に閑かに謡ひ出し、道行は朗らかに、掛合はさらりめに、待謡は閑かにたつぷりと謡ふ。  
△地 初回は朗かにさらりと出で、クリもさらりとクセは閑かに、上端ロンギは朗かに優美に、中入後シテとの掛合は氣の抜けぬ様に引立て、晴やかに、切は調子を變へさらりと、餘り拍子に乗らぬ様に締めて謡ふべし。

玉葛



語釋

初瀬寺 — 聖武天皇神龜三年僧道明、法道仙人と共に戮力して此地に精舎を建立せり。是を泊瀬寺といひ豊山神樂院小池坊と號し、現今眞言宗新義豊山派の本山長谷寺と稱す。本尊は一丈六尺の十一面觀音像なり、尊像の材は近江國高島郡三尾山より流出す此木到るところに疫災あり、漂流して大和國葛下郡袖川の浦に到る。法道仙人此木を取りて佛像を刻まんと欲すれども其資なし。藤原房前これを聞き奏聞して和州の租と稻三千束を賜ふ。仍りて此像成る。則ち方八尺の岩石を坐とし、天平五年五月十八日開眼す。此像靈驗著しきを以て道俗の參籠して精進供養するもの古來より今に絶えず。  
ならの葉の — 古今集第十八卷雜歌下に載す。文屋有末が詠みし歌に「貞觀の御時萬葉集はいづばかり作れるぞと問はせ給ひければよみて奉りける」と詞書して「神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ」と詠まれたり歌意は奈良時代に選集された古歌の集が萬葉集なりとの意。  
石上寺 — 奈良縣山邊郡丹波市町字石上。  
法のしるしや — 法の効驗を見るときいふことを、三輪のしるしの杉にかけていふ。續千載集に「代々たえず法のしるしを傳へきて普く照らす日の本の國」とあり。古今集第十八卷雜

歌下に載す。讀人不知の詠ぜし歌に「わが庵は三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門」とあり。歌意は。私の家は三輪の山麓にある、逢ひたくば尋ねて來れ杉が立てる門がそれであるとの意。  
初瀬川 — 奈良縣山邊及磯城郡に跨がる。河内に入り、大和川となる。  
舟人もたれを戀ふとか大島の — うらかなしげに聲の聞ゆる玉葛の姫君、歸京する船中にて少貳の娘の詠める歌。  
心の月 — 心の本性即ち眞如法性のことを月に喩ふ。  
古河のべ — 古今集第二十卷旋頭歌に載す。讀人不知の詠みし歌に「初瀬川古川のべに二本ある杉年を経て又もあひ見ん二もとある杉」とあり。新古今集第三卷夏歌に載す。藤原有家の詠める歌に「涼しさは秋やかへりてはつせ川古川のべの杉の下蔭」とあり。今、長谷寺門前を古川のべと云ふ。  
海士小舟初瀬 — 海士小舟を初瀬の枕詞とせし歌古來多ければいふ。萬葉集第十卷寄雪に「あまをぶねはつせの山にふる雪のけながくこひし君がおとぞする」とあり。  
補陀落山 — 觀世音菩薩の淨土。  
二本の杉のたちどを尋ねずは — 「古川のべに君を見ましや」源氏物語右近の玉葛の君にめぐりあひたる時の歌。二本の杉は今、長谷寺樓門の東にあり。

何なてしこの — 源氏物語夕顔の巻、夕顔の上より頭中將に送りし歌に「山がつの垣は荒るともをりくにあはれはかけよ撫子の露」とありて、玉葛の君をば撫子に譬へしことあればいふ。  
木の間の月 — 古今集第四卷秋歌上に載す。讀人不知の詠ぜし歌、「木の間より洩りくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」とあり。歌意は、木の間より洩れさして來る月の光の物哀れなるを見れば寂しき秋は早く催せり。との意。  
松浦瀧 — 大伴佐手彦遺唐使出帆せし時、妻の佐用姫其舟を見やりて歎き、石に化せしといふ故事を引く。  
浮島を — 玉葛の船中、兵部の君と云ふ女の詠める歌に「浮島をこぎはなれても行く方や何くとまりと知らずもあるかな」とあるをひく。

響の灘 — 筑前國の北、長門國の西の海。  
年もへぬ — 新古今集第十二卷戀歌二に載す。藤原定家の詠ぜし歌「年もへぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮」とあり。歌意は、幾年も祈り重ぬれど其祈る契りは空しくて寺院の晚鐘を聞く時だにも我れは逢ふこと能はず、他人のみ通ふて契る時あることを察し賜はれといふ意。  
衣の玉 — 法華經受記品に曰く、「人の暗愚なるを衣の裏に玉の附けるを知らず苦しめるにたとへて云へる」とあるを引

く。  
早くも知るや — 右近の歌の返しに玉葛、「初瀬川早くのことは知らねども今日のおふせに身さへ流れぬ」とあり。  
戀ひわたる — 源氏物語玉葛巻に「まことに君をこそ今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ、いと無心にしなしてしわざぞかし」とて笑ひたまふに、面赤みておはする。いと若くをかしげなり。硯ひきよせ給ひて、手ならひに源氏、「こひわたる身はそれなれど玉葛いかなる筋をたづね來ぬらん」と詠みける。歌意は、夕顔を忘れず戀ひわたる身は我もこの玉葛も同じことなれど、我子として尋ね來んには、實の父の方こそいたりけめ。我方へかくより來るはいかなる縁ぞやとの意。  
つくも髪 — 伊勢物語に「百年に一年たらぬつくもがみ我をこふらし面かけに見ゆ」  
憂かりける — 千載集第十二卷戀歌二に載す。源俊賴の詠ぜし歌「うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとはいのらぬものを」  
岩漏る水 — 源氏物語胡蝶、柏木衛門督より玉葛におくりし歌、「思ふとも君は知らじな涌きかへり岩もる水の色し見えねば」  
身より出づる — 後拾遺集、第二十卷神祇に載す。和泉式部



の詠せし歌、「物思へば澤の螢も我身よりあこがれ出づる玉かぞと見る」

螢に亂れつる―兵部卿の宮、玉葛の許に來りし時源氏の君螢多數包み行きて玉葛の几帳の内に放ちしこと、螢の卷にあり。

間狂言

初瀬寺の門前の者玉葛の身の上を語り、亡き跡を弔ひ給へと勸む是は初瀬の門前に住む者にて候。今日は物淋しき折柄なれば二本の杉のあたりへ立ち越え色付く木々の梢を見て慰まばやと存づる。いや是なる御僧は何國より御越しなされたるぞ。(此間せりふ常の如し)去程に玉葛の内侍と申すは。先づ父君は頭の中將にて。夕顔の上の御息女なりしが。母上五條あたり隠れて在す頃。かりそめに光源氏と御契りあり。河原の院へ誘引し其處にて空しうなり給ひたると申す。さあるによつて。夕顔の上の御乳人この玉葛を痛り申す所に。其の頃乳人の男筑紫へ下りし故。力及ばず九州へ御伴申せしが。かの乳人の男後に相果てたるに依り。それより彼方此方と思召す内に次第く美しく成り立ち給ひしを。筑紫の人心を掛け様様に申ししを。御同心なければ。さては押へて奪ひ取り申さんなどと。この沙汰頻りにありつるを聞き。田舎にあり果てん事淺ましく思ひ給ひ。乳人を連れ船にて逃げ上り給ふが。遙

遙の海路なれば危く思召し。我何事も無く都へ上るに於ては八幡初瀬へ參らんと御祈誓あるが。誠に佛神の御恵により難なく京都に着かせ給ひ。御立願の事なれば初瀬詣あるに。古夕顔に召し使はれし右近と申す女房のありつるが。撫子の御行末祈の爲に當寺へ參りて玉葛を見つけ。其の時右近の歌に二本の杉の立ちなどを尋ねずは。古川野邊に君を見ましやと詠み。都に歸り源氏に斯くと申されければ。夕顔の上を痛はしく思召すにより。やがて玉葛を呼び取り給ひて。髪黒の大將の北の方に御成し候。又この玉葛と申す名は源氏の御歌に。戀渡る身はそれならで玉葛如何なる筋を尋ね來ぬらんと。斯く遊ばされし故。玉葛とは名附け給ふ。是に付き數多の仔細のあるとはいへど。先づ我等の存じたるは是の如くにて候。(おかし)是は奇特なる事を仰せらるゝものかな。左様に女性の小き船に掉を差し來るべき者。爰許にては覺えず候が。扱はお僧の御心中貴きにより。古の玉葛の亡魂現れ出で。御詞を交されたと存づる間。暫く是に御逗留あり。かの菩提を御弔ひあれかしと存ずる。



髪

増髪

若き女の眉髷し、些か狂氣めきたる、湯碗の相を

表はせり

面なり

本曲後シテ

浮舟の外

輝丸等に用ふ



本曲後シテ髪を結ぶ時、髪を左髪或は兩髪より垂れ、亂れ髪の意とす。すべて増髪の面著るシテにみらところなり

装束附(玉葛)

作物	後シテ	前シテ	ワキツレ	ワ
	玉葛内侍	里女	從僧二人	キ旅僧
棹	面、増髪 着附摺箔 唐織脱下 葛扇	面、若女 着附摺箔 無紅腰卷 水衣 縫腰帶	角帽子 着附無地鬘斗目 縷水衣 腰帶 數珠 扇	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 數珠 扇



# 玉葛

素菴座席頌  
ワシ  
キテ

早僧詞裕タリ

これは諸國一見の僧にてゆわれ  
 この程は南都にゆひて。靈佛靈  
 社残りなく拜みめぐりてゆ。又  
 これより初瀬詣で志してゆ  
 櫛の葉の。名にお宮のふる  
 こと。名にお宮のふることを。

四時三行上  
ヨクク  
拍子三合ヤ

玉葛



思ひつづけて行く末は石上寺伏

一拜み法元へのしるしや三輪の杉

山本行けば程もなく初瀬川にも

着きたけり初瀬川にも着きたけり

急ぎの程に初瀬川に着きたけり

心静かに冬詣申さずるにてゆ

程もなき舟の洵りや初瀬川

初瀬川にもつきのり



早詞 元ラカハ

シテ女上 朗カニ  
一セイ  
拍子三合ハク



シテ一セイ

上りかねたる。気色かな。舟人も

誰を恋ふとか大島のうら悲し

げに聲立ててこがれ來にける

右のはてしもないさや白波のよる

べいづくぞ心の月の清舟はそこ

と。はてしもなくし。唯われひと

り水馴棹。帯も袖の色にのみ



上歌

○小謡

あら川野邊のさみも



暮れて行く。秋の候か村時雨秋  
 の候か村時雨ふる川野邊のさみ  
 しくも人や見るらん身の程も  
 なほ浮舟の楫を絶え細手かな  
 しきたぐひかな細手かなしきたぐ  
 ひかな。不思議やなこの川は山川  
 のさも浅くくてもかも張る岩間

これはこの初瀬寺に詣でし者なり



傳ひをふもき舟に棹さす人を  
 見れば女なり。そも御身は如何なる  
 人にてましますぞ。これはこの  
 初瀬寺に詣でくる者なり。又この  
 川は所から名に流れたる海士小舟  
 初瀬の川と詠み置ける。その川  
 野邊のえけあるに不審はなませ



給イひニそトとよクあラ面白の言葉や  
 なげに海士小舟初瀬とは古き詠ナガ  
 女の言葉ならべーとらながら又その  
 類タひも波小舟カとて謂ハれのある  
 やらんいや何シ事のそれよりも  
 まづ遠覧せよ折リからに拍子三合ほの見元八度シ  
 色つくホの初瀬山色つく  
テ色つくホの初瀬山色つく

○獨吟



奥もの深き谷の戸に

ホの初瀬山風もうつろみ薄雲に  
 日影も白ふ入のさぞな氣色も  
 かく川の浦わの眺めまでげに類ひ  
 なや面白や川音聞えて里つまき  
 奥もの深き谷の戸につらなる軒  
 をたえだえの霧向に残す夕べ  
 かな霧向に残す夕べかなかくて



補陀洛山も目のあたりに



寺堂に参りつゝ。かくて寺堂に参りつゝ。補陀洛山も目のあたり。四方の眺めも妙なるや。紅葉の色に常磐木の二本の杉に着まきにけり二本の杉に着まきにけり。

シテ詞 光ラカヘ

これこそ二本の杉にてふよよくよく  
お覽ゆへ さらり さらり は二本の杉にて

ゆひけるぞや。二本の杉の立所  
を尋ねずは。古川野邊に君を見  
まよとは。何と詠まられたる古  
歌にてゆぞ。これは光源氏の古  
玉葛の内侍この初瀬に詣で給ひ  
しを。右近とかや見奉りて詠み  
し歌なり。共にあはれと思し召し

玉葛

五



御跡をよみ  
懸ひ



○廿二曲獨吟

て御跡をよみ吊ひ給ひぬへげに  
 やありし世をなほ夕顔の露の  
 身の消えに跡はなかなかに何  
 撫子の形見も憂し。あはれ思  
 ひの玉葛。かけてもいさや知らざり  
 心づくの木の向の月。雲  
 居のよそにいつかど鄙の住居

玉葛

三

明カキリ

の憂まきのみかさても堪へて  
 あるべき身をなほをりつる。  
 人心の荒き波風立ち隔て  
 便りとなれば早舟に乗り後れど  
 と松浦海。唐土船を慕ひ心に心ぞ  
 愛るわれはた浮島を漕ぎ離  
 れても行く方やいつく泊りと

拍子合  
クセ

玉葛

三





三番目トキハ  
方もなし  
クリ地以下

白波に郷音の灘も過ぎ思ひに障  
る方もなし。かくて都の内とて  
も。われは浮きたる舟のうちなほ  
や憂き目を水鳥の陸にまどへる。  
心地してたづきも知らぬ身の程を。  
思ひ歎きて行き慍む足引の大和  
路や唐土までも聞ゆなる。初瀬

の寺に詣でつ。年も経ぬ祈る  
契りは初瀬山。尾上の鐘のよそ  
にのみ思ひ絶えに。右の人にも  
度二本の杉の立所を尋ねずは。  
古川野邊と詠めける。けふの逢  
ふ瀬も。同じ身と思へば法の衣  
の。玉ならば玉葛。迷ひを照らし



給へや<sup>ハコギ地</sup> げに<sup>危ラカヘスラリ</sup> 古き世の物語<sup>フルラ</sup> 聞け  
 ば<sup>ホ</sup> 涙も<sup>ホ</sup> ころも<sup>ホ</sup> り江に<sup>ホ</sup> ころも<sup>ホ</sup> れる水<sup>ホ</sup> の  
 あは<sup>ホ</sup> れかな<sup>ホ</sup> ヤあは<sup>ホ</sup> れも<sup>ホ</sup> 思<sup>ホ</sup> ひは<sup>ホ</sup> 初  
 め<sup>ホ</sup> よ初瀬川<sup>ホ</sup> 早<sup>ホ</sup> くも<sup>ホ</sup> 知<sup>ホ</sup> るや<sup>ホ</sup> 浅<sup>ホ</sup> から<sup>ホ</sup> ぬ  
 縁<sup>ホ</sup> に<sup>ホ</sup> ひ<sup>ホ</sup> かる<sup>ホ</sup> 心<sup>ホ</sup> と<sup>ホ</sup> そ<sup>ホ</sup> 頼<sup>ホ</sup> む  
 ぞ<sup>ホ</sup> よ<sup>ホ</sup> 法<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 人<sup>ホ</sup> 吊<sup>ホ</sup> ひ<sup>ホ</sup> 給<sup>ホ</sup> へ<sup>ホ</sup> わ<sup>ホ</sup> れ<sup>ホ</sup> こ<sup>ホ</sup> そ<sup>ホ</sup> は  
 涙<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 露<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 玉<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 名<sup>ホ</sup> と<sup>ホ</sup> 名<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> り<sup>ホ</sup> も<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> ず



早詞 スラリ

なり<sup>ホ</sup> に<sup>ホ</sup> け<sup>ホ</sup> り<sup>ホ</sup> 名<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> り<sup>ホ</sup> も<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> ず<sup>ホ</sup> な<sup>ホ</sup> り<sup>ホ</sup> に<sup>ホ</sup> け<sup>ホ</sup> り<sup>ホ</sup> 中入間

さて<sup>ホ</sup> は<sup>ホ</sup> 玉<sup>ホ</sup> 葛<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 内<sup>ホ</sup> 侍<sup>ホ</sup> 假<sup>ホ</sup> に<sup>ホ</sup> 現<sup>ホ</sup> れ<sup>ホ</sup> 給<sup>ホ</sup> ひ  
 ける<sup>ホ</sup> ぞ<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> た<sup>ホ</sup> と<sup>ホ</sup> ひ<sup>ホ</sup> 業<sup>ホ</sup> 因<sup>ホ</sup> 重<sup>ホ</sup> く<sup>ホ</sup> とも<sup>ホ</sup> も  
 照<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> せ<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> め<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> 日<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 光<sup>ホ</sup> 照<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> せ<sup>ホ</sup> ら  
 め<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> 日<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 光<sup>ホ</sup> 大<sup>ホ</sup> 慈<sup>ホ</sup> 大<sup>ホ</sup> 悲<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 誓<sup>ホ</sup> 言<sup>ホ</sup> ひ<sup>ホ</sup> あ  
 る<sup>ホ</sup> 法<sup>ホ</sup> の<sup>ホ</sup> 燈<sup>ホ</sup> 火<sup>ホ</sup> 明<sup>ホ</sup> ら<sup>ホ</sup> か<sup>ホ</sup> に<sup>ホ</sup> 亡<sup>ホ</sup> き<sup>ホ</sup> 影<sup>ホ</sup> い<sup>ホ</sup> ざ  
 や<sup>ホ</sup> 吊<sup>ホ</sup> け<sup>ホ</sup> ん<sup>ホ</sup> 亡<sup>ホ</sup> き<sup>ホ</sup> 影<sup>ホ</sup> い<sup>ホ</sup> ざ<sup>ホ</sup> や<sup>ホ</sup> 吊<sup>ホ</sup> け<sup>ホ</sup> ん

四半三入上歌  
 待<sup>ホ</sup> 謠<sup>ホ</sup>  
 拍<sup>ホ</sup> 子<sup>ホ</sup> 三<sup>ホ</sup> 合<sup>ホ</sup>  
 切<sup>ホ</sup> 迄<sup>ホ</sup> 調<sup>ホ</sup> 一<sup>ホ</sup> 声<sup>ホ</sup>  
 切<sup>ホ</sup> 迄<sup>ホ</sup> 雑<sup>ホ</sup> 子<sup>ホ</sup>



後シテ女中困 一声「恋ひわたる身はそれならで玉葛  
拍子三合ハス



如何なるすぢを尋ね来ぬらん尋  
ねても法の教へに逢はんその心  
ひかる一筋にそのまなならで玉  
葛の乱る色は恥かやづくも  
髪ガミ つくも髪ガミ われや恋ふらし  
面影オモかげ に地 立つやあだなる塵の身は



乱る色は恥かしや

黒髪クワダキイ 中廻シ  
この中廻シニツク



あかぬやいつの寝乱れ髪

○獨吟  
○仕舞 拍子三合



人をはつせり山鹿

烈しくおちて

シテ伸 拂へど拂へど執心の地 ながきサ 闇  
路や黒髪の甲 あかぬやいつの寝  
乱れ髪ミ むすほ下 れゆく思ひかな甲  
げに妾執ユメ の雲霧クモ のウ げに妾執の  
雲霧クモ の迷ヒ もヤ 憂ウ かりける  
人を初瀬ハツセ の山鹿ヤマカ 烈ハ く落オ ちて  
露も涙も散々に秋の葉の身もキ





くらげの根のしや



思ひにむせび

朽ち果てね根め<sup>甲</sup>や<sup>申</sup>根みは  
 人をもせをも<sup>申</sup>根みは人をもせを  
 も思ひ思は<sup>申</sup>唯身一つの報いの罪  
 や<sup>申</sup>数々の憂き名にま<sup>申</sup>ち<sup>申</sup>も<sup>申</sup>穢  
 悔の有様或は湧き返り<sup>申</sup>名もる  
 水の思ひに啜<sup>申</sup>び<sup>申</sup>或は焦がる<sup>申</sup>や  
 身より出づる玉と見るまで包<sup>申</sup>め

珊瑚



夢に乱れつる



恥か<sup>申</sup>や



長き夢路は覚めにけり

甲上<sup>申</sup>夢に乱れつる影もよ<sup>申</sup>な  
 や<sup>申</sup>恥か<sup>申</sup>や<sup>申</sup>と<sup>申</sup>この妾執を<sup>申</sup>ひるがへ  
 す<sup>申</sup>心は<sup>申</sup>真如の玉<sup>申</sup>葛<sup>申</sup>心は<sup>申</sup>真如の玉  
 葛<sup>申</sup>長き夢路は<sup>申</sup>覚めに<sup>申</sup>けり

下

下



融

阿彌清次作

曲 五番目  
季 八月  
種 三級  
所 京都市下京區六條河原院

梗概

東國の僧(ワキ)都に上り、六條河原院に来て、田子をかたげて出で來りたる老人(シテ)に、この邊の人かと問へば、この所の汐汲なりと答ふるに、こゝは海邊にてもなきにと怪しめば、昔融の大臣、陸奥千賀の鹽竈の風光をめめて、この所にうつし、難波の浦より日毎に汐を汲ませて焼かせつゝ、一生御遊のたよりとせられしなれば、われを汐汲といはんも理ありと語りて、頻りに懷舊の情に耽る。やゝありて、僧の尋ねるがまゝに、見え渡りたる名所を教へ、思はず長物語に時を過したり、いざ汐を汲まんとて池邊に出づと見しまゝに汐曇りにかき紛れて、跡もなく消え失せたり。(中入)  
僧こゝに旅寝して、なほも奇特を待つ程に、融の大臣(後シテ)現れ出で、月下に昔を忍びて様々の遊舞をなせしが、夜も明け方になれば、月光の中に紛れ入る。

謡ひ方

本曲はさして重き曲にも非れど、前は景色あり情味あり寂びしく閑かに、後は品位を保ち遊宴の華やかに中秋の寂さを加ふ。  
△シテ 一聲の出は調子高くならぬ様に、閑かに寂しき趣に運びを附け謡出し、サシはさらりめに上歌より確かりと謡ひ掛合は閑かにして粘らぬ様に末に至り段々と詰め、初同過の語はしつくりと強くならぬ様に節扱ひ細き處に注意して、名所教は氣を變へはつきりと文句に心付け段々運ぶ様に謡ふ。  
ロンギは朗かにうつきりと謡ふ。  
△後シテ 融大臣の品位を保ち、出端の出はどつしりと大きく朗かに出で運びよく、地との掛合は確かりとさらりめに、切のロンギは調子を改め朗かに淀みなく賑やかに謡ふべし。  
△ワキ 旅僧なれば餘り位を取らず始めは閑かに出で、上歌より朗かにさらりめにシテとの掛合はシテを助けてさらりと名所教の掛合はかゝつて謡ふ、待謡は確かりと謡ふべし。  
△地 初同は閑かにしつくりと、二の同はしつくりと寂しく



「戀しや〜と」と抑へて調子を内へ取り淋しく「木幡山」より氣を變へシテの調子を受けてさりと、ロンギは改めて晴れやかにさりと段々に浮きやかに詠ふ。中入後は晴れやかに大きく剛吟にて確かりと、切のロンギも朗かにさりと詠ふべし。

此切「此光陰に誘はれて」よりは追善の時の小謠に詠ふなり

### 能の異式 (小書)

能 — 舞の中に橋掛へ流しに連れて行くなり。

今合返 — 「夕べを重ね朝毎の」朝毎のと返して詠ふのみなり。ワキ方の習なり。

思立之出 — ワキが「思ひ立つ」と詠ひつゝ出で、夫より名

乗り上歌を詠ふワキ方の習なり。

笏の舞 — 前シテのサシ下歌上歌なく形も替り、後シテは裝束も變り形も舞も替る、詠の中に幕に入り脇の留となる。

十三段舞返し — 早舞を五段二度三段一度舞返すなり。

### 語釋

千里も同じ一足 — 老子に曰く、「合抱之木生於毫末、九層之台起於累土、千里之行始於足下」とあり。

六條河原の院 — 京都六條坊門の南、萬里小路の東と拾芥抄にあり。山城名勝圖會に「今按舊跡自六條坊門至六條」

自萬里小路至京極、此内淨徳寺鎮守曰融公靈社、又有稱鹽竈町所と今の枳殼邸附近

陸奥はいづくはあれど鹽竈の — 古今集第二十卷大歌所御歌に載す。「みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも」とあり。歌意は、奥州はどこも面白い所が多いけれど、別して鹽竈の浦を漕ぐ舟の綱手を曳いて行く景色が面白いとの意。

水の面に — 拾遺集第三卷秋歌に載す。源順の詠みし歌、「水の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋のなかなりける」詞書に、屏風に八月十五夜池ある家に人あそびしたる所、とあり。月なみは月次に浪をかねたるなり。

融の大臣 — 嵯峨天皇第十二の皇子、母は大原金子、源姓を賜ふ。嘉祥の年右近衛中將となり從三位に叙せられ右衛門督となる。齋衡元年伊勢守となり正三位に進み、遂に正二位左大臣に陞る。上表して屢々辭任を請ふも許されず、元慶八年二月陽成帝遜位諸卿共に儲を讓す、融皇族を以て意氣頗る昂る乃ち揚言して曰く、近き皇胤を索むれば融も又其列にありと攝政藤原基經之を排して光孝帝を立つ、寛平中從一位に叙せられ、輦車に乗り宮中に出入するを聽さる、同七年八月薨す年七十四、詔して正一位を贈らる、約千三十七年前なり。融別業を宇治に營み、陽成、宇多、朱雀三帝の行幸あり、これ

今の平等院の前身なり、又山莊を嵯峨に創め棲霞觀と云ふ、今の清涼寺の前身なり、又河原院を東六條に營みしは、貞觀十八年にて元慶五年まで六年間(五十五歳—六十歳)龜居して出でずと云ふ、臺閣水石、華麗を窮め、毎月難波の浦より湖水三十斛を運搬して、海底の魚貝等を棲ましめたり、陸奥の鹽竈の浦を模擬して海人の鹽屋に煙を立て、遊戯せると云ふ、世に河原左大臣と稱す、其跡は今の東本願寺の枳殼邸は其一部と云ひ傳ふ、附近に今鹽竈の井、融の祠あり、又町の名に鹽竈町を遺せり。

千賀 — 陸前國宮城郡の海濱、鹽竈は其別稱。

籬が島 — 鹽竈の浦の沖にあり。

孤舟に — 三體詩に、「五湖歸去孤舟月」の句あり。

鳥は宿す池中の樹 — 賈島の詩に、「鳥宿池邊樹、僧敲月下門、過橋分野色、移石動雲根、暫去還來此、幽期不負言」とあるによる。賈島は唐の韓退元と同時代の詩人。

推すも敲くも — 詩人玉屑に、「賈島始め擧に赴いて京師に下あり、一日驢上にて句を得たり、曰く「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」と。始は推の字を(敲の處に)置かんと欲し、又敲の字を置かんと欲し、之を煉つて未だ定まらず、遂に驢上にて吟哦して時々手を引きて推敲の勢をなす。」とあり。

霧の籬の — 新續古今集第五卷秋歌下に載す。權大納言藤原

實量の詠みし歌に「秋霧の籬が島のへだてゆるそことも見えす千賀の鹽竈」とあり。

難波の御津 — 今、大阪市南區高津町の西方。

君まさで — 古今集第六卷哀傷歌に載す歌に、「君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさみしくも見え渡るかな」とありて詞書に「河原の左のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈といふ處のさまを造れりけるを見てよめる」とあり。歌意は、融公が亡くなられてから鹽も焼かず烟が絶えて、此邸の鹽竈の浦は物寂しく心寂しく思はるの意。

音羽山 — 山城國宇治郡にあり。逢坂山以南の大嶺にして笠取山に連り、近江との國境をなす。

音羽山音にききつつ — 古今集第一卷戀歌に載す。在原元方の詠みし歌に「おとは山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな」とあり。歌意は、音羽山の音に聞く人の事を聞いて居りながら、逢坂の名による逢ふこともせず、關を越えられずに待つて居るとの意。

逢坂山 — 滋賀縣大津市の西方。

歌の中山 — 京都市清水寺の南。

清閑寺 — 京都市清水寺の南、滑谷の北。

今熊野 — 洛東三十三間堂の東南三町許。



紅葉も青き稻荷山——古今著聞集第五卷和歌に載す。歌に、「時雨する稻荷の山のみち葉は青かりしより思ひそめてき」とあり。

藤の森——伏見の北にあり。

夕されば——千載集第四卷秋歌上に載す。皇太后大夫藤原俊成の詠みし歌、「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなる深草の里」とあり。

木幡山——京都府下伏見と宇治との間にあり。

竹田——伏見町の北にあり。

淀、鳥羽——鳥羽は上鳥羽、下鳥羽とて竹田の西にあり。淀はそれよりなほ遙か南方に離れてあり。

大原や小鹽の山も——古今集第十七卷雜歌上に載す。在原業平の詠みし歌に、詞書「二條の後の、まだ東宮のみやす所と申しける時に大原野にまうで給ひける日よめる」として、「大原やをしほの山もけふこそは神代のことと思ひいづらめ」とあり。歌意は、御子孫の藤原氏の御息所が東宮の御母として御参詣ある。大原野の小鹽の山に鎮座する氏神も御満足に思召すとの意。共に山城國乙訓郡にあり。

松の尾、嵐山——いづれも京都府山城國葛野郡にあり。

あづまからげ——新撰六帖題和歌第五卷あさ衣に載す。前左京大夫の詠みし歌「賤の女があづまからげの麻衣ふたまたが

は、さぞわたるらん」とあり。

望汐——十五夜の満汐をいふ。草根集第一卷聖廟法樂詠百首歌秋二十首湖月に載す歌に、「にほのうみ望汐ならぬ波の上に今宵満ちたる月の影かな」とあり。

苔の衣を——狭衣第四卷の上に「此ころは苔の衣をかたしきて岩根の枕ふしよからまし」とあり。

月宮殿の白衣の袖も——月世界の宮殿には墨衣の天人十五人白衣の天人五十人ありて毎夜一人宛交代す。白衣十五人揃へば満月と云ひ、墨衣十五人の時は闇といふ。

三五夜中の新月の色——朗詠集に載す。白居易の詩句、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九、題下に「銀臺金闕夕沈々、獨宿想思在翰林、三五夜中新月色、二千里外故人心」とあり。

光りを花と散らす粧ひ——古今集第十卷物名に載す。源ほどこの詠みし歌、「あきくれど月の桂の實やはたる光を花と散らすばかりを」とあり。歌意は、總べての草木秋は實れども、月中の桂の實は結ばれはせぬ。唯いつもよりさやかに月光を花のやうに散らすのみであるとの意。

影を舟にも譬へたり——百聯抄解に、「月送天涯猶去舟」とあり。萬葉集第七卷に載す柿本人麻呂の詠みし歌には、「天の海に雲の波立ち月の舟星の林にこぎかくる見ゆ」とあり。

雲上の飛鳥は——右の二句は明の太祖の詩に「映水有釣魚怯釣、山無箭鳥疑弓」とあり。

一輪も降らず——一輪は月なり月降らず水昇らず本來の境界を其儘いへり。天臺には、月降不降永昇不昇、判定記には一月不降百水不昇、とあり。

雲となり雨となる——巫山神女のご事なり。文選神女賦、安玉、楚襄王聲一婦曰妾巫山之女朝爲行云暮爲行雨朝々暮々陽臺之下、唐の劉廷芝の公子行に、爲雲爲雨楚襄王、とあり。

### 問狂言

所の者、ワキの問に應じて、鹽竈を都の内に移されたる次第を語り先程の老人は融の大臣なるべしと答ふ。

是は都五條あたりに住む者にて候。今日は物淋しき折柄なれば。河原の院へ立ち出で心を慰めばやと存する。いやこれなるお僧は何國より御越しなされたるぞ。(此間せりふ常の通り)去程に陸奥の千賀の鹽竈を都の内に移されたる仔細は。昔嵯峨の天皇の御宇に。皇子數多御座すと云へど。中にも源の融の大臣と申は。父母の御寵愛限りなかりし故。古來にも聞きも及ばぬとある故に。種々様々の御遊覧をなさるゝ春の花秋の月千種に聚く虫の音。詩歌管絃琴書畫は申すに及ばず。或時は鷹を使はし鹿を狩り。又或は池を掘り山を築せ

其高山には枯木大木を植置かれ。麓には鳥類畜類を放ち置き。朝夕立ち去らず御覽あるとは云へど。是も一旦面白く思召して。重ねて翫び給ふ事も御座なく。或時大臣仰せられける様は。何にても珍らしき事やある。見て慰み度しと御意成れしを。去る人御前にて話し申されしは。陸奥の千賀の浦わの體。世に越えて眺め一入の由申されしを。則ち御覽あり度く思召せど。是よりは遠路にて御下向も叶はざれば。思召し出だされて此六條河原の流れに千賀の海浦を少しも違はず移され。三千の手足を三手に分ちて。津の國御津の濱より毎日潮を波せ。汐時を待ちて一同にあけし程に、さ乍ら差し來る汐の如に有たると申す。去れ共鹽竈く有様無てはと有り。此河原の院に濱をさせ鹽屋を建て。風も静まり陽もうららかなる折節は。皆海士人の出でて鹽を焼くに。花の都なれば宮殿樓閣の内より。鹽屋の煙の細く立昇るを。見る人毎に面白く存せられ。往來の人の立留りたると申す。又あれなるは陸奥の籬が島を移され。いつも左府は御船に召されて御出あり。思ふ友どち御遊成されたと承る。其折節在原の業平も是を面白う思召すか御歌に。鹽竈にいつか來にけん朝なぎに。釣する舟も爰によらんと。斯様に遊ばされたと申す。又それのみならずあの籬が島の森の梢に。鳥の宿し囀りて四門に移る月影迄も。古人の讚せられたると申す。去れ共大臣空し



く成らせ給へば。其後相續して翫ぶ人もなく。今は斯様に名のみ許りにて候。其刻み貫之は立寄りて歌に。君まさで煙絶えにし鹽竈の浦淋しくも見え渡る哉と。かくし給ひたるに候。先我等の存じたるは斯の如くにて候。(註)是は奇特なる事仰せらるゝ物哉。方々の是迄遙々御上り有たるに。誰あつて陸奥の名所をこれへ移されたる仔細を。語申すべき者有まじきと思召し。融の大臣の御亡心假に見え給ひ。委く御教へ成されたと推量致す。餘りに不思議なる御事なれば。今宵は爰に御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存ずる。



約四尺五寸の荷竹の  
 雨端より麻紐にて田子を吊る。  
 田子は杉より作り、紐高七寸程  
 前シテ之を荷ひて出づ。絃上前子  
 同じ。

融扇  
 黒骨妻紅にて、  
 表裏に秋草を描き  
 秋虫のあるを融扇  
 本曲及び絃上の  
 後シテに用ふ。

田子

小道具	後シテ	前シテ	ワ	装束附(融)
	源融大臣	尉	キ旅備	
田子	面、中將 初冠纒 赤地金緞鉢卷 襟白赤 着附赤地縫箔 込大口 指貫 單狩衣又ハ直衣 縫腰帶 融扇	面、笑尉又ハ朝會尉 尉髪 襟淺黄 着附無地尉斗目 茶水衣 緞子腰帶 腰囊 尉扇	角帽子 着附無地尉斗目 水衣 緞子腰帶 扇 數珠	





ワキ名乗

ワキ僧詞 裕タリ

融トホル

素謡座席順

ワシキテ

これは東國方より出でたる僧に

てゆわれまだ都を見ずゆ程に。

この度思ひ立ち都に上りゆ寛タリ

思ひ立つ心ぞくく雲を分け舟下歌中一ツ

路を渡り山を越え千里も同拍子合

一足に千里も同ト一足にト

融

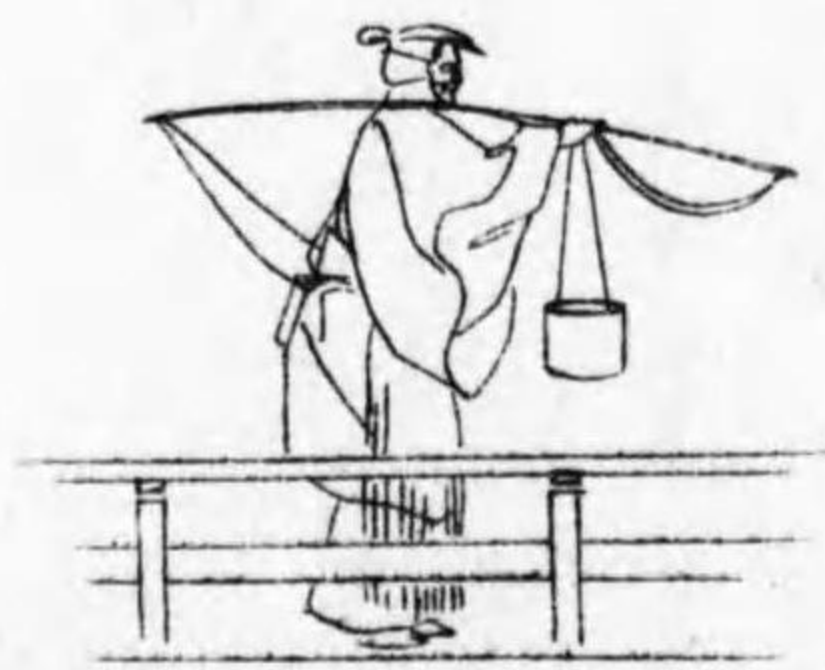
一



上歌

夕べを重ね朝毎の夕べを重ね  
朝毎の宿の名残も重なりて  
都に早く着きにけり都に早く  
着きにけり 詞サテリ 急ぎの程にぞれ

ははや都に着きてゆこのあたり  
をば六條河原の院とやらん申しゆ  
暫く休らひ一見せばやと思ひゆ



奇ミチの比

ミテ尉上  
一セイ  
ツヨク  
拍子ニ合ハズ

月もはや出汐になりて塩竈の  
浦さび渡る。気色かな陸奥は  
いづくはあれど塩竈のうらみ  
て渡る老が身のよまるべもいさや  
定めなき。心も澄める水の面に  
照る月なみを数ふれば今宵そ秋  
の最中なる。げにやうつせは塩竈



シテサシ下歌上歌



○小謡

一 中ノ下ト下ニシラ  
 一 最中かな秋は  
 半ば身は既に老い重なりて諸白  
 髪ガウ上歌ウツ雪ユキとのみ積りぞ来ぬる  
 年月の積りぞ来ぬる年月の  
 春を迎へ秋を添へハルニキづぐる松の  
 風までフウもわが身の上と汲みて  
 知るシル夕ユフ馴ナレ夜袖寒ヨロモき浦わの秋

シテロキの間茶



ロキ詞

一 夕べかな浦わの秋の夕べかな  
 いかイカにニこれなる尉ジウ殿御身はこの  
 あたりの人かシテアノカニさサんンぶブこの所の夕シホ  
 汲クミにてニゆユ不思議フキサナリやヤは海邊ウミノヘに  
 てもなまきにシホ夕ユフ汲クミとは誤アヤマりたるか尉  
 殿シテサラリノニあアらラ何ナニともなやナヤさサそソを  
 ばいづくとも知ろシラるルされてゆぞ





ワキ サラリ

この所をば六條河原の院とこそ  
承りては河原の院こそ塩竈  
の浦によ。融の大臣陸奥の千賀  
の塩竈を。都の内に移されたる  
海邊なれば。名に流れたる河原  
の院の河水をも汲め池水をも  
汲め。塩竈の浦人なれば。汲

となどおぼさぬぞや。げにげに

陸奥の千賀の塩竈を。都の内  
に移されたる事承り及びては  
さそはあれなるは。離が島によ。融の  
大臣常は。舟を寄せられ。酒  
宴の遊舞様となりし所ぞ



さんあれこそ  
離が島によ

ミテ 閑カニ

法

四



思ひ出づる



か。や。月。こ。そ。出。で。く。ゆ。へ。げ。に。げ。に  
 月。の。出。で。く。ゆ。ぞ。や。あ。の。籬。が。島。の。森  
 の。梢。に。鳥。の。宿。し。轉。り。て。も。ん  
 に。う。つ。る。月。影。ま。で。も。孤。舟。に。歸。る  
 身。の。上。か。と。思。ひ。出。で。ら。れ。て。ゆ  
 何。と。唯。今。の。面。前。の。景。色。が。お。僧  
 の。御。身。に。知。ら。る。と。な。も。し。も。買

シテ詞 元ラカヘカレ心

○小 謡

松風も立つなりや



島。が。言。葉。や。ら。ん。鳥。は。宿。す。池。中  
 の。樹。僧。は。敲。く。月。下。の。門。推。す  
 も。敲。く。も。古。人。の。心。今。目。前  
 の。秋。暮。に。あ。り。げ。に。や。古。も。月  
 には。千。賀。の。塩。竈。の。月。には。千。賀  
 の。塩。竈。の。浦。わ。の。秋。も。半。ば。に。て。  
 松。風。も。立。つ。な。り。や。霧。の。籬。の。島

虫

五



□小書ノ時  
アリ

隠れいざわれも立ち渡り。昔の  
跡を。陸奥の千賀の浦わを眺  
めんや千賀の浦わを眺めん。

塩竈の浦を都の内に移されたる

謂れ御物語りゆへ。嵯峨の天皇の

御宇に融の大臣陸奥の千賀の塩

竈の眺望を聞し及ばせ給ひ。

シテ語ノ中



この所に塩竈を移し。あの難波

の津津の浦よりも。日毎に潮を

汲ませ給ひて塩を焼かせつ。一生

御遊の便り給ふ。然れどもその

後は相續して翫ぶ人もなれば。

浦はそのまゝ千代となつて池

邊に淀む溜り水は。雨の残りの

世

六





うらさみくもあはれはつ

古き江に。落葉散り。浮く松陰。  
 の。月だに澄まで。秋風の音のみ。  
 残るばかりなり。されば歌にも君  
 ままで煙絶えに。塩竈の。うらさみ  
 しくも見え渡るかなと。貫之も  
 詠めてゆ。同中受ケテミソリげにや眺むれば。月  
 のみ満てる塩竈の。うら淋しく

○小謡



音のふ  
なはかりなり

ワキ詞

も荒れ果つる跡のせまでもし  
 ほぐみて。老の波もかへるやらん。  
 あら昔戀。や上歌戀。や心切戀。や心切戀。やと。  
 慕へども歎けども。かひもなきさ  
 の浦千鳥音のふ。鳴くばかり  
 なり音のふ。鳴くばかりなり。  
 しかに尉殿。見え渡りたる山々は

左ラカヘサラリ

閑心

虫

虫



皆名所にてぞゆらん御教へ

シテ<sup>閑カニ</sup>いさむ比皆名所にてゆ。御尋ねゆ

へ教へ申しゆべ。まづあれに

見えたるは音羽山ゆか

あれこそ音羽山ゆよ

に聞きつ逢坂の關の北方にと

詠みたれば逢坂山も程近うこそ

あれこそ音羽山ゆよ



ゆらめ 仰せの如く關の北方にとは

詠みたれどもあなたに當れば

逢坂の山は音羽の峯に隠れて

カ<sup>カ</sup>シ<sup>シ</sup>サ<sup>サ</sup>フ<sup>フ</sup>リ<sup>リ</sup>ニ<sup>ニ</sup> 拍子三合ハズ

この邊よりは見えぬなり

音羽の嶺つゞき次第次第の山並

の。名所名所を語り給へ 語りも



清閑寺今熊野シカル上ラはあれぞか  
 さらそその末に續きたる里一村の  
 森の木立コダニシテ詞確カリメ それをさるべに遊覧  
 せよ。まだまき時雨の秋なれば。紅  
 葉も青きイナ 稻荷山ヤマ 風も暮  
 れ行く雲の端の梢も青き秋  
 の色シテ詞スラリ以下五ニツ 今こそ秋よ名に負ふ

春は花見ハナミ 藤の森フジノノリ 緑の空キナド  
 も影青き野山ノノヤマ に續く里は如何に  
 あれこそシテ 夕さればユフサレバ 野邊ノノヘ の秋風アキカゼ  
 身にミミ みてミテ 鶉鳴ウズラナリ なるユツタリ 深草フカクサ  
 山ヤマ よヨ 木幡山キハタヤマ 伏見野竹田フシノタケノタ 淀鳥イソト  
 羽ハ もモ 見ミ たるタル たりタリ やヤ 眺ノゾミ めメ やヤ するスル。そ  
 なたの空は白雲のばや暮れ初む



○獨吟

本藩山伏見野竹田

ヨクイコト

同中

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト

ハコト



あれこそ大原や



る遠山の嶺も木深く見えたる  
 は如何なる所なるらん  
 あれこそ大原や小塩の山もけしきこそ  
 は若葉の初めつらぬなほなほ  
 問はせ給へや  
 聞くに付けても  
 秋の風吹く方なれや嶺續き西  
 に見ゆるはいつくぞや  
 秋もはや

嵐山も見えたり



秋もはや半ば更け行く松の  
 尾の嵐山も見えたり  
 嵐ふけ行く秋の夜の空澄み昇る月  
 影に  
 隙もおして月にあで  
 乗じて身まばげに  
 秋の夜の長物語すなやまづ

忘れたり秋の夜の





口小書ノ時  
キ切ル事  
アリ

汲めば月や



汀に帰る彼の夜の



○切走難子

ワキ上歌  
確カリナニ  
待望  
ツヨク

いざや汐を汲まんとして持つやた  
この浦東からげの汐衣汲めば  
月をも袖にもち汐の汀に帰る彼  
のよるの老人と見えつるが汐曇り  
にかき紛れて跡も見えずなりにけ  
り跡をも見せずなりにけり ○中入間  
磯枕苔の衣を片敷きて苔の衣を

後シテ上  
融大臣  
出端  
拍子三合ハズ

片敷きて岩根の床に夜もすがら  
なほも奇特を見るやとて夢待ち  
顔の旅寝かな夢待ち顔の旅寝かな  
忘れて年を経るものを又おに  
帰る波の満つ塩竈の浦人の  
今宵の月を陸奥の千賀の浦  
わも遠き世にその名を残す大臣



後シテ謀の中



雲を廻らす雲の袖



融スの大臣ホトとはわが事サなり。われ  
 塩竈シホガキの浦ウラに心を寄ヨせ。あの雞マが島シマ  
 の松蔭マツノカゲに明月ミツキに舟フネを浮かめ。月宮ツキノミヤ  
 殿デンの白衣ハククの袖スベテも。三五夜サンゴノヨ中の新月シンゲツの  
 色イロ。千重チカヘふるや。雲クモを廻マらす雲クモの袖スベテ  
 さすや桂ケイの枝エダ々に。光ヒカリを花ハナと  
 散チらす粧ヨソギひ。こゝにも名ナに立つ

曲水の盃



同

ロギ地上  
拍子ニ合

○獨吟  
○仕舞



それは西岫に

白河シラカハの波ナミの。あら面白ウツクシや曲水マヅミの盃スベテ  
 うけたりうけたり遊舞ユウブの袖スベテ。早舞ハヤマシ  
 あら面白ウツクシの遊樂ユウラクや。そも明月ミツキの  
 その中ナカにまだ初月ハツツキの宵ヨ々に影カゲも  
 姿シズメも少オウなきは如何イカニなる謂イハれなる  
 らん。それは西岫サイウに入日イリヒの未マだ  
 近チカければ。その影カゲに隠カさる。たとば



霞む夕べの遠山



釣と疑ふ



雲上の飛鳥は



池邊の樹に宿し



月下の波に伏す



月もはや



○小謡

影傾きて明方の



月のある夜は星の薄きが如く  
 なり 青陽の春の始めには  
 霞む夕べの遠山 黛の色にみか  
 づきの影を舟にもたとへたり  
 又水中の遊魚は 釣と疑ふ  
 雲上の飛鳥は 弓の影も驚く  
 一輪も降らず 萬水も昇らず

鳥は池邊の樹に宿し 魚は月  
 下の波に伏す 聞くとも飽かじ  
 秋の夜の鳥も鳴き 鐘も  
 聞えて 月もはや 影傾きて明方  
 の雲となり 雨となる。この光陰に  
 誘はれて 月の都に入り 給ふ粧ひ  
 あら名残惜しの面影や名残惜しの



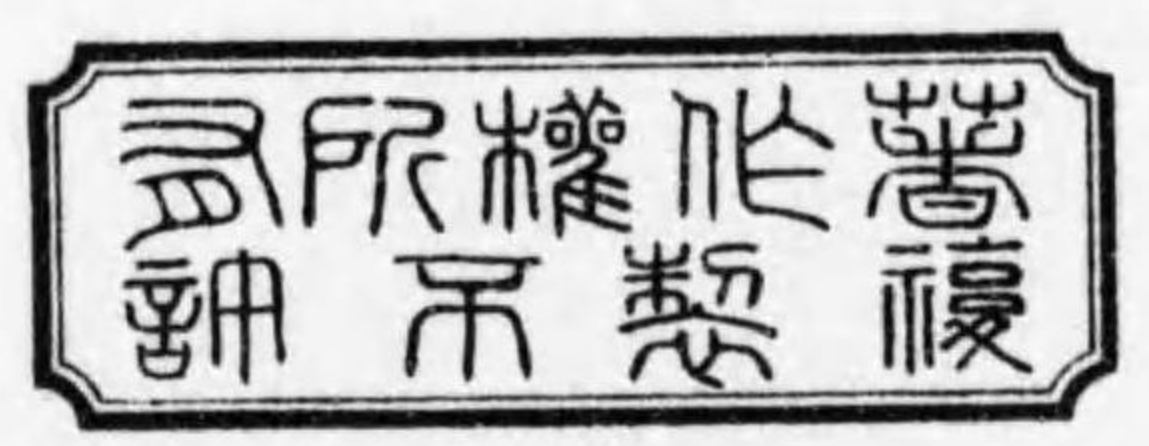
月の都仁



二十、六月  
面影。

昭和六年八月十日納本  
昭和六年八月十五日發行

橋本與吉



訂正著作者

世四世  
觀世左近

發行兼  
印刷者

東京市神田區錦町二丁目十番地  
檜常之助

發行所

檜書店

京都店

京都市二條通越屋町東北角  
振替大阪三六一八番、電話上二九〇番



終